東京大学大学院新領域創成科学研究科
社会文化環境学専攻

2020 年度
修　士　論　文

過程を奪われる社会
―名前のない生きづらさに〈応答〉する場の実践から―

A Society Deprived of Process
：from the Practice of the Places that "Respond" to
the Nameless Difficulty of Living

2021 年 1 月 18 日提出
指導教員　清水　亮　准教授

木 村　佳 菜 子
Kimura, Kanako

目次

プロローグ.....4
序論.....5
第一章　問題の所在.....6
1.1　現代の生きづらさの背景と現状.....6
1.2　「名前のない生きづらさ」.....7
1.2.1　「名前のない生きづらさ」とは.....7
1.2.2　名づけのジレンマ.....8
1.3　本研究の立場と目的.....10
1.3.1　研究の立場.....10
1.3.2　研究の目的.....10
1.4　研究手法.....11
第二章　シューレ大学の事例.....12
2.1　概要.....12
2.2　設立背景.....13
2.3　経緯.....15
2.3.1　設立準備委員会.....15
2.3.2　模索期の学び創り.....15
2.3.3　修了のあり方.....17
2.4　「働く」の再構成.....18
2.4.1　「働く」をめぐる困難.....18
2.4.2　関係性の経済圏.....19
2.5　社会のまなざし.....21
2.5.1　社会のシューレ大学に対する認識.....21
2.5.2　国内外の「学び」観.....22
2.5.3　「許されないマイノリティ」.....23
2.6　小括.....25
年表.....26
第三章　YC スタジオの事例.....27
3.1　概要.....27
3.2　設立背景.....29
3.2.1　我が子の不登校と親の会.....29
3.2.2　子どもの居場所.....31
3.2.3　YC スタジオ設立.....32
3.3　経緯.....34

3.3.1　層の広がりと連携の模索 34
3.3.2　仕事づくりの挑戦 35
3.4　「生きづらさ」という言葉のぼかすもの 36
3.4.1　E さんの社会運動 36
3.4.2　「生きづらさ」への違和感 38
3.5　小括 39
年表 40
第四章　なるにわの事例 41
4.1　概要 41
4.2　設立背景 42
4.3　活動の経緯と内容 44
4.3.1　日常を共有する場へ 44
4.3.2　テーマ型の場 45
4.3.3　参加費と場の運営 47
4.3.4　コムニタス・フォロからなるにわへ 49
4.4　場の立ち位置 50
4.4.1　〈波打ち際〉に留まる 50
4.4.2　折り合いと「水脈」 52
4.5　小括 53
年表 54
第五章　R さんの開いている場の事例 55
5.1　場の概要 55
5.2　場づくりに至るまで 56
5.3　京都のらびと学舎 57
5.3.1　設立背景 57
5.3.2　経緯 58
5.4　話しの場 62
5.4.1　背景 62
5.4.2　私の探究・研究相談室、DIY 読書会、リードイン 63
5.5　「応答」という考え方 65
5.6　小括 66
年表 67
第六章　考察 68
6.1　過程を奪われる社会 68
6.1.1　〈応答〉と過程 68
6.1.2　過程がないことの生きづらさ 69

6.1.3　過程を奪う名前 70
6.1.4　〈応答〉のある社会 71
6.2　結論 72
6.2.1　総括 72
6.2.2　本研究の含意と今後の課題 73
付録 74
参考文献 78
謝辞 83

プロローグ

私は理学部 4 年生の時に大学を休学し、スタートアップ企業での長期インターンや自身の興味を探る活動をしていた。ところが、働き始めて一か月もしないうちに調子を崩し始め、夏頃には身体に異常をきたしてしまった。その後メンタルヘルスケアに関心を持ち、今度はその領域の社会的企業で働き始めた。しかし、釈然としないことが多く、そうした私の様子を見て上司はハラスメント傾向を強めていった。再び衰弱し、半年もたなかった。

「私はどこかおかしいのではないか」。そう思い、それらしき「診断名」を探してさまよったこともあった。そのような中で、『「心の専門家」はいらない』（小沢 2002）や当事者研究、シューレ大学の「自分研究」、そして社会学と出会い、漠然と抱いていた違和感が徐々に言語化されていった。個人の問題だと思い自己否定を重ねていたことが、実は社会的な問題であったことに気がついていった。小沢は、あらゆることを個人の内面の問題へとずらし「治そう」としてしまう心理主義を批判し、私に大きな衝撃を与えた。当事者研究は、「問題」とされている出来事・個人のあり方を捉え直し、属性の異なる人々と私の共通性を示した。「自分研究」からは社会規範の内面化という見方を教わり、私自身も自分研究をするようになった。

このような経路を辿って、私は自分の語りを取り戻していき、自己否定からも徐々に解放されていった。同時に人文社会科学への関心を強め、「一度研究をしっかりとやって、論文として形にしてみたい」と思うようになった。

一方で、社会の枠組みや通念に対する乗っかれなさ、「うなずけない、という気持ち」（野田・山下 2017）はなくならなかった。このようなあり方で生きていきたいという願いが、この社会で実現できるとは思えなかった。また、そうした切実な問題関心をリアルな関係性や日常生活の中で共有できず、閉塞感や停滞感を覚えていた。

「突破口はどこにあるのか」。この研究は、そのような状態にあった私が自由の風を感じ始めるまでの軌跡である。

序論

我々は日々生活する中でしばしば生きづらさを経験する。生きづらさの一部は言語化され、社会環境の改善を求める運動を通して社会問題化されてきた。日本においては、高度経済成長期の公害をめぐる住民運動や、1970, 80 年代の当事者運動、2000 年代後半の反貧困活動等があり、それぞれに成果を上げてきた。

一方、こうした社会問題化の回路にうまく乗らなかった生きづらさは、1990 年代頃からの個人化の加速に伴い、個人的に処理すべきものと見なされるようになった。そして社会に不適応を起こした人々は、専門家らによって精神障害や発達障害、パーソナリティ障害、ひきこもり、ニートといった名前を付与されていった。

そうした状況の中、それでもなお既存のカテゴリーに還元できない「名前のない生きづらさ」が聞かれ始めた。例えば、過重労働やいじめ被害の経験がないにもかかわらず働くことができなくなる、障害の診断は受けていないものの世の中の前提に「乗っかれなさ」を覚え、自己否定感や社会生活への絶望感を抱く等だ。名前がないとはいえ切実さに劣るということはなく、自らの生きづらさの正体が把握できず対処できない、周囲や社会に理解・許容されない、福祉制度の対象外になる等、名前のないことに起因する困難が上乗せされることもある。

しかし、「名前のない生きづらさ」に対して新たに名前を付与したとしても、人々をカテゴライズすることには必然的に漏れ落ちが伴う。また、名前の付与がマイノリティの括り出しにとどまれば、生きづらさを生んでいる社会構造を維持することになる。そこで本研究では、生きづらさの名前をあえて問わないことで、別の視座を引き出すことを試みる。

よって本研究の目的は、①生きづらさを個人化せず、名前のないままに受け止め応じようとする実践を解明すること、②そのことを通して新たな視座を導き、従来の対応や社会のあり方の問題を指摘することである。

第一章では、現代の生きづらさの背景と現状を概観し、「名前のない生きづらさ」や本研究の立場と目的、および手法について説明する。第二章から第五章では、生きづらさを個人化せず、名前のないままに受け止め応じてきた 4 事例について記述し、それぞれのあり方を目的①に沿って小括する。第六章では、事例の考察を通じて〈応答〉と過程という要素を抽出し、生きづらさへの従来の対応や社会のあり方の問題を議論する。

第一章　問題の所在

1.1　現代の生きづらさの背景と現状

我々は日々生活する中でしばしば生きづらさ[1]を経験する。そうした生きづらさの一部は言語化され、社会環境の改善を求めるクレイム申し立て活動（Spector & Kitsuse 1977=1990: 123）を通し「社会問題」として認識されてきた。日本においては、高度経済成長期の公害をめぐる住民運動や、1970，80 年代の部落出身者や身体障害者、ゲイや不登校、女性の当事者運動、2000 年代後半の反貧困活動等によって、様々な生きづらさが社会問題化されていった。こうした運動の多くは共通の出自や属性を足場にし、担い手として差別や抑圧等の「敵」を定め断固立ち向かうような「強い主体」を想定していた（好井 2014）。そして法や制度の新設・見直し、マイノリティへの差別的言動を是認しない風潮の形成等、様々な成果を上げてきた。

一方で、集約しづらく分かりづらい、あるいは「強い主体」の現れづらい生きづらさは、こうした社会問題化の回路に乗らずに取り残されてきた。この残余的な生きづらさは、1990 年代頃からの「個人化 individualization」の進行によって、個人的に対処すべきものとされる傾向が強まっていった。ここで言う個人化とは、19 世紀後半から 20 世紀にかけて個人が伝統社会から解き放たれ産業社会へと再統合されていった過程のことではなく、個人が産業社会から世界リスク社会へと再統合されることなく解き放たれる過程のことである（伊藤 2008）。それまでリスクに対する緩衝材となっていた中間共同体や国民国家が弱体化し、個人がむき出しのまま社会へ投げ出される事態とも言え、ベックによれば、このような条件下で生きることは「システムの矛盾を個々人の人生において解決していく営みとなる」という（Beck 1986=1998: 269）。個人化が進むことで、個人の中で自らの経験・人生と社会とが結びつかなくなり（伊藤 2008）、人々の関心は社会変革から個々人の生き残りへと移っていった[2]。「生きづらさ」というある種曖昧な言葉が、苦しみや困難の表現として 1990 年代半ばから多く観測されるようになった（貴戸 2018: 43-45；藤野 2007）のも、個人が生きづらさを社会との関連で認識できなくなったことや、集約しづらく分かりづらいというその性質を反映したものと言える。

個人化の進む中での生きづらさへの対処は、しばしば医療や心理学を動員してなされていった。その過程をここでは、生きづらさの医療化・心理主義化と表現したい。医療化とは、従来は医療以外の問題であったものが、社会的な相互行為を経て、医療の範疇内で扱われたり医学的に定義づけられたりするようになる過程のことで（株本 2016）、心理主義化[3]も同

---

[1] 「問題経験」（草柳 2004）とも言えよう。

[2] そのため、共通の出自や属性、集合的アイデンティティを足場にした運動も成り立ちづらくなっている。

[3] 「心理学化」「心理化」と言うこともある。

様に、あらゆる事象が個人の内面や心理の問題へとずらされていくことであるが、これらは個人化と親和性の高いものであった[4]。社会に直接投げ出された個人は、先に述べたようにシステムの矛盾により発生した問題の処理に追われていくが、当然その際に不適応を起こす人々も発生する。すると、そうした人々の集団は精神障害や発達障害、パーソナリティ障害、愛着障害、ひきこもり、ニート等と名づけられ、専門家らによって対象化されていった。疾患名や障害名が付された者は、従属的な地位に置かれる代わりに不適応の責任が軽減・免除されるが（Conrad et al. 1992=2003: 467-470）、そうでない者―例えば「ひきこもり」や「ニート」―は、「責務を果たしていない」としてしばしばバッシングの対象となった。免責や「治癒」への期待から人々は「診断名」[5]を求める傾向にあり、アダルトチルドレンや新型うつ、Highly Sensitive Person（HSP）、発達障害グレーゾーン等、新たな名前が考案・輸入され流通する現象が繰り返されている。これらの「診断名」は、人々にとって自らの生きづらさを表し証明する名前なのだ。

1.2　「名前のない生きづらさ」

1.1 では、出自や社会的境遇、集合的アイデンティティを足場にしたクレイム申し立て活動によって生きづらさが社会問題化される回路がある一方で、その回路に乗らなかった残余的な生きづらさが、個人化の進行に伴い、医療化・心理主義化されていったことを論じた。本節では、「診断名」も付かないさらなる残余―「名前のない生きづらさ」について見ていく。

1.2.1　「名前のない生きづらさ」とは

1.1 で述べたように生きづらさを表す「診断名」が続々と出現する中、それでもなお既存の名前―集合的アイデンティティと「診断名」の両方―に還元できない生きづらさが聞かれ始めた。例えば、過重労働やいじめ被害の経験がないにもかかわらず働くことができなくなる、障害の診断は受けていないものの世の中の前提に「乗っかれなさ」を覚え、自己否定感や社会生活への絶望感を抱く等だ。名前がついていないとはいえ切実さに劣るということはなく、自分の生きづらさの正体が把握できず対処できない、周囲や社会に理解・許容されない、福祉制度の対象外になる[6]等、名前を持たないことに起因する困難が上乗せされる。時に、生きづらさを表す名前を持つ人々に対して、相対的剝奪感を覚えてしまうこともある。

ここで、本研究の事例の一つでもある「なるにわ」の、参加者とコーディネーターによる著書『名前のない生きづらさ』（野田・山下 2017）を参照したい。野田は、前述のような生きづらさを「名前のない生きづらさ」と呼び、次のように表現した。

---

[4] Beck（1986=1998: 193）も「社会的危険の個人化」と心理学ブームを関連付けている。

[5] 本来診断されるものではない概念も含まれる。

[6] 選別主義的な制度からは漏れ落ちるため、働くことができない場合困窮しやすい。

より正確に言うのならば、自分の生きづらさに「名前がない」ことに途方に暮れていた。住む家がないとか、食べるものがないといった生存そのものが脅かされる状況にいるわけではなく、病気を持っているわけでもない。心療内科に通院はしているが、きっちりとした診断名をもらっているわけでもないし、発達障害ともちがうようだ（発達に偏りのない人なんているのかと個人的に思ってはいるけれど）。不登校だったけれど、いじめにあったわけでも、教師からの体罰があったわけでもない。反発や葛藤はありながらも、夫婦仲のよい両親に、真心をもって育てられたし、心身ともに暴力とは無縁の家庭だった。…（中略）…

たぶん世間的にみて私は「特筆すべき問題を抱えていないのに、なぜか学校に来ないし、働きもしない」という、何とも「よくわからない」存在なのだ。

…（中略）…

それでも私は、何だかよくわからないなりに、毎日つらかった。心の中がもやもやしているし、「これが正解ですよ」と、やかましく響き渡っている世間の価値観にはうなずけない部分が多すぎた。だけど、そこに冠するべき名づけを持てない。名前が、どこにもないのだ。

バカな私は、いじめや体罰、機能不全家庭や家族からの暴力といった、生きづらさにある程度明瞭な原因、つまりは名前を持っている人たちをうらやみさえした。彼らの激痛と自分のにぶい痛みをひき比べて、卑屈になったり、すねてこっそり涙を流したことも、一度や二度ではない。そういうときは、自分がどうしようもなく醜い存在のように思えた。

（同書: 47,48）

野田の語りはあくまで一例ではあるが、生きづらさに名前がないことで苦しみが重層化するということがうかがえる。

1.2.2　名づけのジレンマ

では、このような「名前のない生きづらさ」に新たな名前を付与すれば良いのだろうか。

「名前のない生きづらさ」は、働くことができないという局面で先鋭化し、像を結ぶことから、「若者支援」と呼ばれる領域がしばしば取り扱ってきた。不登校の〈その後〉研究者である貴戸理恵の研究もその一つである。

貴戸は、若者の困難の要因をマクロな社会構造に求める教育社会学や労働社会学の議論を受け継ぎつつも、それらの社会要因論が「社会に問題があると言ってもすぐには変わらないから、有利に生きるには自分を変えるしかない」といった形で、人々のリアリティにおいて自己責任論と併存できてしまうことを指摘し、ミクロ～メゾな関係性の水準から生きづらさに接近しようとしてきた（貴戸 2011）。

また貴戸は、前述の「なるにわ」と、その一企画である「生きづらさからの当事者研究会

（通称・づら研）」について、参与観察や参加者へのヒアリングで得たデータから分析を行っている。貴戸（2018）および Kido（2018）によれば、それらの場では関係性の回復を通して参加者の「自己」の生成が起こっており、そのことを経て参加者は「自己」のニーズに基づき「社会」とつながろうとしていくという。こうしたことを可能にする場の条件として、①目的設定の間接性…就労支援を直接的な目的としないこと、②対話の促進…独白でもなく正否を判断するのでもなく対話していくこと、③外在化…問題を個人の内面から切り離し対象化すること、が挙げられている。

中でも、①目的設定の間接性に関して貴戸は、なるにわのような「居場所」やづら研のような互助的な語りの場を「若者支援」の制度的枠組みに乗せることを展望する。ただし、こうした場が予測可能性や評価の指標、期間等の点において現行制度と馴染まないとも述べており、新たな制度のあり方を構想する必要があるとしている。その一方で場の側にも、「間接的な目的設定」の論理を戦略的に用いて制度化を目指すことを貴戸は提案する（Kido 2018）。

貴戸の提言は、「名前のない生きづらさ」を抱える人の一部を、「若者」という名前をつけて制度的に掬い上げようとするものと言える。こうした名づけによって、我々はそのことについて議論しやすくなるが、その一方でいくつかの問題も存在する。

まず、人々をカテゴライズし名づけることは必然的に漏れ落ちを伴う点である。元来名前のついた生きづらさの残余である「名前のない生きづらさ」に名前をつけたとしても、その残余として名前のない領域が再び発生することが予想される。このことは、「名前のない生きづらさ」の生まれた背景についての野田の記述からもうかがえる。

> *「ひきこもりだから生きづらい」「恋人がいないから生きづらい」「親との関係で生きづらい」……などなど、それぞれの抱えている「生きづらさ」にフォーカスをあてて毎月のテーマを決めているづら研で、いつからか私は自分の、そして参加者のなかに「名づけようのない」生きづらさが存在していることに気がついた。名前をつけたそばからズレていってしまう、かげろうのような生きづらさ。*（野田・山下 2017: 46,47）

貴戸も、こうした漏れ落ちを認識しているが、若者の失業や無業による生活難という緊喫の課題に対処するため、譲歩せざるを得ないと考えたのだと思われる。しかし、名づけに基づき制度化することは、しばしば「残余の発生→名づけ→制度化→残余の発生…」というループに入ってしまう。

もう一つは、名づけがマイノリティの括り出しにとどまりうる点だ。その場合、括り出された人々は現在の社会構造の中に再配置され、そもそもの生きづらさを生んでいる社会環境や構造、秩序は維持される。それゆえに貴戸も、制度のあり方や「働く」の定義そのものを再構想する必要性と論じていると思われる（貴戸 2018:183）。

このように生きづらさを抱える人への名づけはジレンマをはらんでいる。そこで本研究

では、名前のないところに留まることで、別の視座や論点を引き出すことを試みたい。

1.3　本研究の立場と目的

1.3.1　研究の立場

本研究では、生きづらさへの対応について次のような立場をとる。

1. 生きづらさを個人的な問題と定義する「生きづらさの個人化」の回路を相対化する見地に立つ。
2. 生きづらさに名前をつけることの意義を認めつつも、1.2.2 で述べた理由から、別様の生きづらさへの応じ方も同時に必要であると考える[7]。ただし、念を押すが、本研究は「人は皆生きづらい」として特定の属性における被抑圧や被差別の程度を矮小化するものではない。

1.2.1 では野田の語りを引用しながら「名前のない生きづらさ」の困難性を述べたが、その一方で、野田は次のようにも記している。

> *名前のない状態それ自体が悪いことで、名づけやカテゴライズが必要かと問われれば、必ずしもそうではないのではないか*（野田・山下 2017: 50,51）

> *いまここにあるどのカテゴリーにもあてはまらないのならば、あたらしいかたちを模索することができる。生きていくうえで発生する、たくさんの問いを、手放さずにいられる道を。*（同書: 54）

本研究も、名前がない、あるいは名前を付けないからこそ見える地平があるという考えの下、論を進めていく。

1.3.2　研究の目的

前節で述べたように、本研究は、生きづらさを個人化することや生きづらさに名前をつけて対応することとは別様のあり方を探求するものである。よって本研究では、

1. 生きづらさを個人化せず、名前のないままに受け取り応じようとする実践を解明すること
2. そのことを通して新たな視座を引き出し、生きづらさへの従来の対応、ひいては社会のあり方の問題を指摘すること

---

[7] 現に様々な主体によって実践されているとも考える。

を目的とする。同時に、各事例の実践を記録し残すことも副目的とする。

本研究は、生きづらさに応じる社会環境の側に焦点を当てるため、生きづらさの具体的な内容については各当事者の多様な語りや手記、他の関連研究を参照されたい。また、本研究は「生きづらさを抱える人をいかに支援するか」というよりは、「事例がこの社会の何を照射しているか」に重心を置いて議論していく。

1.4　研究手法

前述の目的を果たすため、本研究では、生きづらさを個人化せず、生きづらさに名前を求めないまま応じようとしてきた場を事例とし、フィールドワークを中心とした質的調査を行った。本研究における「場」とは、物理的な場所というだけでなく、関係性や活動、文化や構造を含めた総体のことである。

事例の多数性をのぞみにくいこと、母集団の設定が難しいことから、無作為ではなく判断によるサンプリングを行い、シューレ大学（第二章）、YC スタジオ（第三章）、なるにわ（第四章）、R さんの開いている場（第五章）を事例とした。調査対象者に別の対象者の紹介を依頼したわけではないためスノーボール・サンプリングではないが、各事例は筆者の見出した社会ネットワークにおいて直接的・間接的につながっている（付録参照）。ただし、事例を追加する際には、事例同士の比較のため変数を考慮した。

研究手法については、場およびその周囲環境の変遷や認識法則を明らかにするため、ヒアリング調査や参与観察、文献調査を採用した。同様の理由から、ヒアリング対象者を場の立ち上げ時から現在までを把握している人とした（計 4 人）。フィールドワーク等の履歴は付録に、ヒアリング対象者の情報は各事例章にて記載する。

ヒアリング調査は、現地における一対一の対面式および非構造化インタビューを基本とし、必要に応じてオンライン会議ツールでの追加調査を行った。また、活動や会食等に参加する中で得られたインフォーマルなヒアリングデータも参考にしている。ヒアリングは、研究目的や調査で得られたデータを論文等で扱う可能性があること、論文が東京大学学術機関リポジトリにて公開されることを、書面及び口頭で説明し、承諾を得てから実施した。録音も使用許可が得られた場合のみ行った。ヒアリング内容の確認を口頭および原稿を通して行い、ヒアリング対象者から修正・補足の要請があった場合にはそれらに応じた。

文献調査においては、場や運営に関わる人々の発行する書籍や冊子、HP や関係者のブログ、SNS 投稿、行政資料、寄稿記事やインタビュー記事等も分析対象とした。

本論に掲載したデータには、必要に応じて下線を引き、() を用いて内容を補った。また、発言の趣旨を変えない範囲で中略やトリミングを行った。

データの分析過程では KJ 法や年表作成を適宜行った。

第二章　シューレ大学の事例

本章では、シューレ大学の事例を取り上げる。シューレ大学には現在の社会に生きづらさを覚える人が多く在籍するが、学生らによってこの場で実践されているのは「生きづらさへの対処」ではなく、「学び」と「生き方創り」である。また、一般には「生きづらさに名前を求めないこと」と「目の前の生活」とが相容れないことがままあるが、シューレ大学では生活・生計に関する取り組みも行われている。

本章では、シューレ大学の設立背景、活動の経緯、生活・生計に関わる取り組み、そしてシューレ大学から見える社会について記述し、その上で生きづらさに関するシューレ大学のあり方を小括する。

2.1　概要

シューレ大学は、1999 年に NPO 法人東京シューレの一部門として始まった「デモクラティック大学」[8]である。文部科学省認定の大学ではなく、入学試験や単位システム、カリキュラム、在籍年数の制限は設けられていない。現在学生は 25 人ほどおり、これまで不登校やひきこもり、一般大学の中退や就職後の困難、大学院生等、様々なバックグラウンドの人が所属してきた。

シューレ大学では自分の生き方を創造することを主目的としており、大学の運営も学生自らが中心となり行われている。英語や歴史等の講座（学生が企画できる）、映像やデザイン、「自分研究」等の実習、映画祭や研究発表会、演劇公演や絵画展等の年間行事を通して、学びを深めている。また、精神的にも体力的にも無理なく行える仕事を学生間で融通し合う「アルバイトの会」や、外部からの仕事を経験できる「パイロットプロジェクト」等、働く環境を自ら作っていく仕組みもある。さらに国際的な活動も多く、韓国や台湾、ロシアの学びの場との交流、留学生の受け入れ、APDEC（アジア・太平洋フリースクール大会）の実行委員会への参画等をしている。

図 1　シューレ大学正面（シューレ大学 HP より）

[8] シューレ大学の造語。「オルタナティブ大学」とも言う。

こうした活動を支える人として常勤と非常勤のスタッフがそれぞれ 2 人ずつおり、その他多様なアドバイザーや外部講師、団体が関わっている。

シューレ大学へ入学するには 5 日間の体験入学とスタッフとの面談が必要となる。入学時にかかる費用は入学金 15 万円と年 63 万円の学費だが、これらの金額も皆で話し合って決められたものだ。

調査時には、新宿シューレ・株式会社創造集団 440Hz とともに新宿区の旧出張所の建物に入居していたが、2020 年 9 月より「TDU―雫穿（てきせん）大学」として独立し、ワーカーズコープ（日本労働者協同組合）が新しく借り上げたビルへと移転した。

本研究では、設立時からのスタッフである A さん（50 代男性）にヒアリングを行った。A さんにはシューレ大学の HP から連絡を取り、ヒアリングは 2019 年 12 月 24 日および 2020 年 7 月 10 日にシューレ大学内の一室にて実施した。本文中では前者の実施分を「A さんヒアリング①」、後者の実施分を「A さんヒアリング②」と表記する。

元々大学で不登校についての社会学的研究をしていた A さんは、1992 年からボランティアとしてフリースクールの東京シューレに関わり始めた。やがて、東京シューレにいる子どもたちが既存の学校と異なる文化を形成していることに気がつき、そこに社会の可能性を見出すようになる。A さんはより関わっていきたいと思い、東京シューレの側もそれを求めた。そこで、本格的にスタッフになり、研究は続けつつも軸足を東京シューレに置くことになった。そして 1998 年、東京シューレの OBOG とともにシューレ大学の設立準備委員会を立ち上げ、現在（2021 年 1 月）に至るまで常勤スタッフを続けている。

2.2　設立背景

1990 年代後半、日本でフリースクールが設立され始めてから 10 年以上が経ち、フリースクールの OBOG の人数が増加していた。当時はフリースクールの数が少なく、利用希望者のウェイティングリストがあるような状況だったという。ウェイティングが長引くことで子どもが絶望的な心境になることもあり、フリースクールの年齢上限は 18～20 歳と現在よりも低く設定されていた。しかし、日本社会において 20 歳ほどでその後の生き方を展望するのは容易ではない。

江戸時代みたいに職業が選べない人が多かった時代と今は違うので、選べるってこと自体はもちろん悪いことだとは思いませんけれども、18,9 とかでどう生きようってことを、明確な指針があってその指針をどう実現するかっていうことまでわかってるっていう人はほんの一握りだと思うんですね。（A さんヒアリング①）

当時は、「小学校―中学校―高校―大学あるいは専門学校―就職」という「レール」に例えられる規範が若者やその親も含め社会的に共有されており、フリースクール出身者や家

庭を中心に学んでいた人[9]等、「レール」から逸脱した人々は「人生がひらけない」ように感じていたという。また当時、受験競争が激しく[10]バブル崩壊後でもあったため、大学入学したとしてもまもなく就職活動へ突入させられる状況だった。つまり、「レール」の上に乗っていたとしても自分の関心を掘り下げる時間や機会は非常に乏しかったのだ。

「私はどういう人間なのか」「自分のしたいこととは何か」「それらをどのように見つけ、実現することができるか」ということを探求したいにもかかわらず、行えそうな場が見当たらない。フリースクールの OBOG の中には、このことで精神的に追い詰められてしまった人もいた。

東京シューレでは、シューレ大学の話が持ち上がる数年前から、OBOG を交えて研究会が行われていた。「そういう『自分から始まる学び』みたいなことをやりたい人達っているなあという感触はずっとあった」（ヒアリング①）と A さんは振り返る。

また A さん自身も、以前から「自分から始まる学び」を行う場に強い関心を持っていた。関西に生まれた A さんは、転校の多い小学校時代を送った（計 4 校）。転校生というだけでも転校先では少数派にならざるを得ないが、関西から関東へ引っ越したことで言葉の壁にぶつかることもあった。転校経験にのみ還元できるものではないものの、やがて A さんは「自分にとっての当たり前と皆にとってのそれが異なる」「社会の中で自分は少数派である」といった肩身の狭さを覚えるようになり、それは中学校以後も続いた。

10 代の A さんの「肩身の狭い少数派が生きにくいこの社会をいかにして生きやすくできるか」という問いは、「自分から始まる学び」の場への関心へと繋がっていった。A さんの通っていた高校は大学進学率が高く、勉強の主目的には大学受験が据えられていた。「受験に向けた勉強」の枠組みの中から自分の関心に近いものを見つけ、引きつける等の工夫はできるものの、自らが人として生きていく上で理解したい・表現したいと思うことは追求できず、「他律的な」学びであると感じていた[11]。A さんもかつて「自分から始まる学び」の場を欲する一人だったのだ。

こうして、フリースクールの OBOG らの切実なニーズと A さんの思いが重なり、A さんは新しい学びの場づくりに関心のあるメンバーに声をかけていった。「『自分から始まる学び』を行える場がないなら作ろう」という意気込みで、OBOG ら 8〜9 人（最終的には 6 人）と A さんは、東京シューレのスタッフのサポートを得ながら学びの場の設立準備委員会をスタートさせた。

---

[9] ホームエデュケーション等。

[10] AO 入試の割合も 2020 年現在より小さかった（文部科学省高等教育局 2020）。

[11] その背景には、A さんがそうではない学びの存在、例えばドイツの 10 代の若者が運営する文化的な場「コム」等の事例を知っていたこともあるだろう。

2.3　経緯

2.3.1　設立準備委員会

さて、このように立ち上がった準備委員会は「吾輩の会」と名付けられた。夏目漱石の小説『吾輩は猫である』の「吾輩は猫である。名前はまだ無い。」という冒頭部分をもじったものである。しかし「吾輩の会」という名前では自分たちにとっても外から見ても、場の実態が捉えがたい。また、場について人に説明する際に毎度何分も割けるわけではないため、名前だけである程度イメージできるようにする必要があった。

幾度もの議論が重ねられた末、「シューレ大学」という名前に決まった。「シューレ」は、ドイツ語の「学校」ではなくギリシャ語の「精神を自由に使う」に由来しており（東京シューレ 2020)、場の趣旨を表しつつ東京シューレの一部門であることも示しているとして採用された。一方の「大学」については、既存の学校制度を想起させる単語を使うべきなのかという議論があった。しかし、学齢期を過ぎた人が学びながら自らの人生を形作っていく場は一般には大学がイメージされること、「大いに学ぶ」という表記は場の趣旨から外れていないことから、語弊は認識しつつも用いるに至った。

場の名前だけでなく場所や学費等、シューレ大学の仕組みについても皆で決めていった準備委員会だったが、「ないものを説明する難しさ」に非常に悩まされたという。例えば、「自分から始まる学び」を求める人々と出会い仲間に加わってもらうには、そうした人々に届くように情報を発信しなければならない。また、シューレ大学のアドバイザーには多様な分野で活躍する 50 人ほど[12]が当時から名を連ねているが、そのアドバイザーを集める際にも当然「ここは一体どのような場なのか」を説明する必要がある。ところがその説明が、参照点となるようなモデル事例がなかったために困難を極めたのである。

2.3.2　模索期の学び創り

この「モデルがない」という難しさは 1999 年の開学後にも別の形で実感されることとなった。具体的にどのようにして学んでいけばよいのかについても手探りする必要があったのだ。それは一般的な新設校とは事情が異なると A さんは語る。

世の中には新設校みたいな（慣習を身につける際に参照する上級生がおらず）一年生から始まる所があるじゃないかっていうのはあるんですけれど、それは他の中学校や高校が実は意外にモデルになってるんですよね。テレビの中にも漫画の中にも中学校や高校は溢れているし、親たちや兄弟たちの中にも中学校や高校の記憶っていうのがあって、いろんなところで実はあるんです、リソースが。だけどデモクラティック大学っていうのは何もないんですね。…（中略）…「自分で自分の学びを作るんだ」ということを望んで自分たちで始めてるけど、実際に具体的にどう動けばいいのっていうことは難しいんですよ。

---

[12] 最首悟、平田オリザ、上野千鶴子、原一男等。

自分のことは自分で決めるし、自分の教育は自分でデザインするし、その場自体もお互いにアイデア出し合って共同で運営する。それってどういうことなの、ということができるまでに 2-3 年かかりますかね。（A さんヒアリング①）

また、アメリカの大学によく見られる、数多ある講座の中から自由に選択ができる形式とも異なっていた。

シューレ大学がやろうとしていたことはそういうことではなくて、…（中略）…一人ひとりが自分の欲する学びを自分で創ってく、で周りのスタッフ・アドバイザー等々の人たちが、本人が「ここちょっと手伝って」っていうところを手伝うっていう、そういうとこですよって（A さんヒアリング①）

このことを A さんは、「Amazon で物を買うと無数に近いような選択肢があると思うんですけど、それが自由っていうわけではない」「学びの主体があくまでも本人」とも表現している（A さんヒアリング②）。

参照するモデルのない中で、自分の学びを創るとはどのようなことなのかを学生らは模索し続けた。その過程は、演劇公演および「自分研究」の発端に垣間見ることができる。

演劇公演は設立 3 年目から行われており、今ではシューレ大学の大きな年間行事の一つとなっている。意外にも、演劇に取り組むようになった背景にはソーラーカーのプロジェクトがあるという。設立 2 年目、「鈴鹿市で開催される国際ソーラーカーレースへ出場したい」というある学生の声をきっかけに、プロジェクトチームが結成された。設備も知識も乏しい状態で始めたが、助成金の申請から設計、材料の切り出しや溶接まで、数多の工程を少人数で行っていった。必然的にコミュニケーションが密になり時にぶつかることもあったが、同時に関係性も強まっていった。結果レースへの参加も叶い、充実したプロジェクトとなったが、ある学生はその一連のプロセスに価値を見出していた。それは、自己をぶつけ合いながら何かを作り上げる、そのこと自体をメインにした活動がしたいという話へと発展していく。アイデア出しを行い、その中の一案であった演劇をすることになった。それが形を変えつつ現在まで続いていくのである。

かたや「自分研究」も、設立後の模索期に始まった活動だ。

「自分研究」とは、自分にとって切実なことや深めたいことからテーマを設定し、他の学生やスタッフへ都度開きながら研究していく実践である。シューレ大学では「自分から始まる研究」や「当事者研究」[13]と呼ぶこともある。特徴としては、自らの生きづらさを解体し自分はどう生きていきたいのかを捉えやすくするものであることや、個人の心理に話を押し込めず社会から受ける影響を視野に入れていること等が挙げられる。これまで「尊重病の

[13] 「自分研究」は浦河べてるの家等の当事者研究を知る以前から独自に行われていた。

正体を知る―自己否定の構造を解体する」「私の〈働く〉ことへの拒絶感とはどのようなものか―折り合いの可能性を求めて」「なぜ自分の『育ち』を肯定できないのか」等、様々なテーマで研究がなされてきた。毎年秋には「世界を自分に取り戻す」と題して研究発表会と紀要の発行が行われ、外部の人からも「面白い」「共感した」「自分のことも振り返りたくなる」と好評を博している[14]。

このような「考え、発表し、意見交換をする」こと自体は設立 1 年目から行われていた。しかし、学びが深まっているという手応えが思いのほか得られず、流れていってしまう感覚を抱くようになる。そこで A さんが論文を書いてみることを学生に提案したところ、やりたいという声が上がった。仲間に研究過程を開きながら反応をもらい、思考を深めていくことを一年間繰り返し、言葉にしたものが実際に紙になる。そうした研究・論文執筆の工程が、自分にとって切実な問いを扱うことに適することが分かっていった。そして設立 3 年目、初めての研究発表会および紀要発行に至ったのである。

図 2　研究発表会内のシンポジウム（シューレ大学 Facebook より）

2.3.3　修了のあり方

2.1 で述べたように、シューレ大学には在籍年数に決まりはなく、「ここでやりきった」「大事なものを得られた」「この自分で生きていけそう」等、自分の中で納得したタイミングで修了する。修了プロセスは独自の形式をとっており、修了報告会というイベントを任意で開くことになっている。この会は設立時からあったものではなく、学生の声から生まれ皆で形作ってきたものだという。

---

[14] 筆者も初参加時（2017/10/28）に、衝撃とともに同様の感想を抱いた。

シューレ大学って、色んな事を人と共有し相談しながら一緒に作りながらやってく。で、自分がシューレ大を出るっていう時の意思決定にも関わってもらいたい、あくまで自分で意思決定するんだけれども、そこで一緒に考え合うプロセスも持ちたいっていう声が出たんですね。それは修了する人から。（A さんヒアリング②）

学生の一人に密着した映画（監督はシューレ大学 OG）では、修了しようとする学生と親しい学生とがプライベートで集まり、修了についてお互いの思いをぶつけ合う場面もあった（石本 2019）。

修了を希望する学生は、修了報告会までに半年ほどかけて準備をしていく。そして報告会当日は口頭発表を中心に、自作アニメの上映や詩の朗読、資料の展示等を通してこれまでの学びを振り返る。発表後の質疑応答を経て最後に、ともに活動してきた仲間から拍手をもらう時間がある（「運命の拍手」）。その上で修了するかどうかを宣言するのだという（雫穿大学 2020）。修了する学生も在学生もやや緊張する会であるが、会をもって修了となった暁には皆でお祝いパーティーを開催している。

2.4 「働く」の再構成

ここまでシューレ大学やそこでの学びが創られていく過程を見てきたが、シューレ大学の目的である「自分の生き方を創る」について、学生らが大きな関心を寄せる事柄がある。それは生計、および「働く」をめぐる問題だ。多くの人にとって生計とはすなわちお金と仕事のことであるが、シューレ大学ではどのように取り組まれてきたのだろうか。

2.4.1 「働く」をめぐる困難

シューレ大学の学生の中には、「働く」ことに関する困難を経験してきた人が少なくない。例えば学生の一人は、アルバイトをしていた頃を振り返って次のように記している。

ハンバーガー店で働いている時には、「センサーを切る」という感覚があった。たとえば僕には六八五七個のセンサーがあって、そのセンサーで自分の痛みや喜びや、人の悲しみやうれしさとかいろんなものを感じ取っている。だけど、そのセンサーを全くオープンにしていては働くことができない。…（中略）…

僕にとって働くとは、自分を職場の価値観の枠にはめていくことである。配管工をしているとき、その枠にはまるあり方が「学校と同じだ」と思った。学校では、多少なりとも抗えた。職場では抗えない。…（中略）…

最後に定期的にアルバイトをしたのは、世界的なチェーンを持つハンバーガーショップだった。シフトが自由に組めることと、ハンバーガーが好きであることが理由で選んだ。働く時間も短いし、工事現場の肉体労働などに比べればはるかに楽だった。楽なはずだった。だけど、数時間の仕事が終わった後、僕の体はでろでろに疲れきっていた。（シュー

レ大学編 2010：107-111）

他にも、逃げるように職場を転々としたり、優れた成績を上げながらもバーンアウトしたり、給与を得る代わりに魂を売っていると感じたり等、学生らにとって「働く」とは、しばしば「自分が自分であれなくなるもの」として刻まれている。

2.4.2　関係性の経済圏

とはいえ、親が年金受給者、片親（東京シューレ 2020）、シューレ大学への入学に無理解といった理由で親に学費を十分に出してもらえなかったり、地方から上京し一人暮らしをしていたりして、経済的に厳しい状況にある学生も少なくない。

そこで、学生有志で作られたのが「アルバイトの会」だ。アルバイトの会では、シューレ大学とつながりのある人々から仕事を募り、メンバー間で融通し合いながら、テープ起こしや PC のセッティングから、草抜きや墓掃除まで様々な仕事を請け負っている。また、それだけでなく、エクストラバージンオリーブオイルを主成分にした石鹸の製造・販売も行っている[15]。外部のアルバイトとは別にアルバイトの会があると良い理由について、学生（当時）の一人は次のように述べる。

> *シューレ大学では「自分から始める」ということを大事にしているが、一般の労働現場では、自分から始まる云々はむしろ望まれない場合もある。するとシューレ大学と働くことの間に落差が生まれてしまい、働くことが気疲れにつながってしまう。*（シューレ大学編 2010: 189）

さらに通常のアルバイトでは拘束時間や労働環境の面でも消耗することがあり、そうなると自らの学びに充てるエネルギーも枯渇してしまう。しかしアルバイトの会は、常時仕事があるわけではない一方で、仕事の得方や内容上、「気疲れ」せずに働くことができるという。

加えて、メンバー間で仕事を調整し合えるというのもアルバイトの会の大きな特徴だ。例えば、誰かが生活に困り多めに働きたい時や、仕事を請け負ったものの動けなくなった時、落としどころが見つかるまで都度メンバーで話し合っている。

> *これが普通の会社や学校であれば休むことなど許されないが、シューレ大学ではお互いが「そういうこと（=急に動けなくなること）もある」ことを了解しあっているので、ほかのメンバーでなんとかやりくりしながら、できるだけ安心して休めるようにしている。*（同書: 189,190）

---

[15] マルセイユ石けん「あわあわ」https://awaawa.tokyo/

アルバイトの会は、シューレ大学という基盤と、大学内外の関係性や文化を生かした互助のシステムなのである。

また、学生有志による夕飯づくり（通称・ペコ）という取り組みも存在する。

週に 3 回は有志が食事を作って安いお金で、一食 250 円なんですけど、夕食を食べられるっていう機会もあって、栄養補給もそうだし、コミュニケーションの場にもなりますよね、結果として。（A さんヒアリング①）

前の月に各日の調理担当を決めておく形で運営されており、料理のできない人でも関心があれば、調理担当の手伝いを通して料理に親しむことができるという（雫穿大学 2020）。

このように、学生らの生活を支える仕組みや工夫も、シューレ大学の資源を使いつつ、学生自らによって創られてきたのである。

一方で、自分がこれまで取り組んできたことが仕事になりうるのか試してみたい、というニーズもある。そうしたことを行えるのが「パイロットプロジェクト」だ。

学生らはパイロットプロジェクトを通して、「安心してある種失敗もできるような」（A さんヒアリング①）環境でシューレ大学の外から仕事を受託し、実際に収入を得ることができる。業務としては映像制作やデザイン、ホームページ制作、書籍や雑誌の編集・レイアウト等があり、必要に応じてプロから助言を得たり、納品後にクライアントから感想をもらったりすることもできる。クライアントは、NPO や OBOG 関連、アドバイザーや講師のつながり、シューレ大学のイベントに参加し感銘を受けた人、A さんが講演で知り合った人等、様々だ。

（クライアントとの）打ち合わせから最後の日までプロセスありますけれども、最初から全部じゃなくてもいいんですけど最終的には全部に関わって、「ああ、こういうふうにやるんだ」と外の人とのやりとりを通じて知っていったり（A さんヒアリング①）

以前はどうしても仕事を「与えられている」感覚で、相手に従わねばならない気持ちになった。すると不満にもつながるので、粗雑に仕事をこなすことも少なくない。しかし今は、私が請けている仕事が何の意味があって、どういう場所で生かされるのかを理解するために、相手とやり取りしようとする気持ちになる。（シューレ大学編 2010: 192）

学生らは、クライアントと直接やり取りし、仕事の工程を断片化させないことで、自らの仕事の意味や位置づけを把握している。そのため納得感をもって取り組むことができ、また、仕事を「一緒につくり合っているような気持ち」（同書: 192）になるという。

こうしたパイロットプロジェクトで経験を積み、修了後、映像・デザイン制作の企業（創

造集団 440Hz）や出版社（東京シューレ出版）を起業する、といったことも起こっている。

2.5　社会のまなざし

こうした活動が行われてきたシューレ大学だが、社会の側はシューレ大学をどのように認識してきたのだろうか。本節では、シューレ大学を窓に社会の枠組みや認識を見ていきたい。

2.5.1　社会のシューレ大学に対する認識

繰り返しになるが、シューレ大学は「自分の生き方を創るための学びの場」である。しかしそのことは、設立後しばらくは周囲に理解されず、現在でも「ひきこもりの人が人生の再スタートを切るために集まっている」「傷を癒し合っている場所」のように切り取られることが少なくない。

ひきこもり経験者がいるというのは間違いではないんですけど。結果として居場所になるけど、そうやっているわけじゃないんですね。（A さんヒアリング②）

無論、シューレ大学において他者と学び合う中で回復したり、「自分が自分らしく居られる」という意味で居場所になったりすることはある。しかしそれはあくまで結果であり、シューレ大学は自分の生き方の基盤を創造する場なのである。

制度においても「居場所」として位置付けられることがある。例えば、シューレ大学は 2018 年から東京都の「ひきこもり等の若者支援プログラム」の登録団体になっている。「ひきこもり等の若者支援プログラム」は若者社会参加応援事業の一環で、東京都が NPO 法人と連携しながら実施している（東京都 2019）。このプログラムは「訪問相談・支援」「自宅以外の居場所の提供（フリースペース）」「社会参加への準備支援（社会体験活動）」の 3 つから構成され、シューレ大学は「自宅以外の居場所の提供」として登録されている。このことについて A さんは次のように語る。

「学びの場」というのがないんですよ、3 つしかなくて。「訪問」と「居場所」と「職業訓練」みたいな。世の中が考える枠組みはそんなもんなんじゃないですか、まだ。

―参加団体になるにあたっては、登録していることでシューレ大学のことを必要としている人に届いたらいいなっていう？

まあそうですね。あれはでも東京都の方から激しいアプローチがあったっていうほうが正確かもしれません。（A さんヒアリング②）

このプログラムを通しては有償で 2 日～3 ヶ月間体験入学することができるが、利用者数は「ちらほら」といった程度で多くはないという。

社会で流通しているこうした枠組みとの付き合いについて、A さんは、「自分から始まる

学び」をしたいと感じている人に情報が届きやすくなる面はあるとしつつ、次のように語る。

東京都のプログラムに参加したからといって私たちは何も変えてなかったりしますし、私たちの枠組みに合うようにできるんだったら応募しよう、それが無理だったら応募しない。…（中略）…やっぱり、原点ぶれたらおかしいことになってきちゃうので。（A さんヒアリング②）

このように自分たちの軸を確認しながら都度話し合い、社会の認識や枠組みと折り合いをつけている。

2.5.2　国内外の「学び」観

一方、海外では異なる受け止められ方をしており、そのことは A さんへの国内外からの講演依頼に見て取れる。国内では「生きづらさ」「不登校」「ひきこもり」等についての講演依頼が多いが、海外においては「デモクラティック大学」や「オルタナティブ大学」についての依頼が少なくない[16]。講演回数自体は国内の方が多いものの、学びの場への関心は海外の方が高く感じられるという。

さらに、海外からのコンタクトは講演依頼だけではない。自分の生き方を創造する学びの場を自国でも作りたいという相談が寄せられるのだ。海外講演や APDEC（2.1 参照）、IDEC（世界フリースクール大会）を通してシューレ大学に関心を持ったスペインやポーランド、台湾の人々と、Skype でやり取りをしたり視察を受け入れたりしているという。

2.2 で述べたように、シューレ大学の背景にはフリースクールでの実践がある。このことをふまえると、他にもフリースクールの文脈から成人の学びの場が生まれてきても不思議ではないが、日本においてはあまり多くないのだという。

今のフリースクールの流れは、「通信制高校で高卒資格取って、専門学校か大学に行く」ってのがトレンドですよね。ここ（=シューレ大学）は大卒資格出ませんから（A さんヒアリング①）

大都市圏を中心に大学進学率が上昇し 5 割に達する中で（文部科学省 2019）、「デモクラティック大学」を選択肢に入れるのは本人にとっても保護者にとっても難しいのではないか、と A さんは語る。

また、学びを追求する人々の年齢によって社会からのまなざしが異なるともいう。

子どもは「世の中で面倒を見るもの」とか「自分より力がない弱い存在だから社会がどう

---

[16] A さんは韓国、中国、ウクライナ、トルコ、フィンランド等で講演を行ってきた。

にかしなきゃいけない」っていう風に考えるんですけど、働く年代の人たちに対する社会の見方は…（中略）…「学ぶ？何言ってんの」っていう視線の方がどちらかというと多いですし、まあ攻撃的にまでならないとしても、理解を持つっていう人は実はフリースクール関係者の中でも多くはないかもしれませんね。（A さんヒアリング①）

日本においては成人の学びが、仕事のため、あるいは余暇に趣味として行うものと捉えられている。そのため、いわゆる「生産年齢」にあたる人々が自分にとって切実な学びを生活の中心に据えようとすると、多くの場合周囲に理解されないだけでなく、保障もない中、勤め先含め生活を大幅に組み替えざるを得ない。

このことは子ども達も苦しめていると思っていて、つまり「学ぶことができるのは 22,3 までなんだよ」と。…（中略）…無言のプレッシャーが子どもたち・若者たちにもかかってる…（中略）…
（生きることの基盤を創ることは学生らにとって）贅沢なことではなくて、息ができるかどうかみたいな非常に切実なことなんです。資格が出るか出ないかとかいうことではなく、私が人間的に生きられるかどうかってことがかかってるんですね。（A さんヒアリング①）

こうした学びに人生のどのタイミングで向かっていくかは人それぞれであり、A さんはそのタイミングが尊重されるべきだと考えている。

2.5.3 「許されないマイノリティ」

ヒアリングの中で、「許されないマイノリティ」についての言及が何度かあった。A さんは「マイノリティ」は minority の直訳である「少数派」とは意味が異なるのだと語る。

マイノリティってただ単に数の問題じゃないわけですね。例えば数の問題だけだったら「日本の中でオリンピックの金メダリストって何人います？」っていう話で、もう不登校の人数どころではないですよね。でも圧倒的にマイノリティ（=少数）でも「あの人たちをマイノリティと呼びますか？」っていう（A さんヒアリング①）

オリンピック金メダリストやノーベル賞受賞者は、全国に 16 万人以上いる不登校児童（文部科学省初等中等教育局 2019）や推計 100 万人以上のひきこもり（内閣府 2016, 2019）と比べて遥かに少数であるが、決して「マイノリティ」ではない。「マイノリティ」という語彙には社会的な位置付けや肩身の狭さが含まれるのである。さらに話は「マイノリティ」の中の「許されるマイノリティ」と「許されないマイノリティ」に及ぶ。

話を分かりやすくするためにちょっと乱暴に言いますけれども、例えば身体障害者っていうのはそういう意味で「世間で許されるマイノリティ」になりつつある。また、子どももそうです。で、白血病とか…（中略）…なんていうんでしょうね、「弱い」「可哀想」とかそういうカテゴリーに入れられた「マイノリティ」は社会が許容する。だけど、「自分たちがこんなに頑張ってるんだから（君たちも）そうしろよ」っていう風に当てはめるカテゴリーの人たちに対しては相当厳しいと思います。（A さんヒアリング①）

つまり、通学や賃労働、家庭形成といった社会規範に沿うことが難しい、あるいは庇護・支援される立場にあると了解される者は「許され」、そうでない者は「すべきことをしていない」として「許されない」という。そのことは、A さんがある公立中学校へヒアリングに訪れた際に一人の中学生からかけられた言葉にも表れている。

ある中学生が「私は正直言わせてもらえれば、不登校の子たちは絶対許したくありません」って言ってきたんですね。「それはどうして？」って聞くと、「私は全然学校に行きたくないし、何も楽しいことも良い事もないのに、こんなに私は頑張って学校に来てるし、来ないなんて許されないのに、なんで不登校の子だけが学校に行かないで許されるんですか？」って。（A さんヒアリング①）

こうした反応について A さんは「許してしまえば自分の基盤が崩れかねないからだ」と語る。

「許される／許されない」というところから筆者は医療化の免責機能を想起し、そのことを A さんに話してみた。1.1 で述べたように、この 30 年は様々な「診断名」が精神医学や心理学の領域で生成・輸入されてきたが、そうした現状に対して A さんは次のように語った。

―精神疾患についても新しい病名が出てきて、診断名を求めて医者の所に…

そうそう、それは病気にしないと許されないから。だからそれはもう、当事者の側も医療の側も病気とすることによって許される空間を作るしかないところがありますからね。子どもでも大人でも。それは結構トリッキーで、病気の名前を、障害の名前をどんどん作ってるんですけど、それは自己否定にも繋がるんですよ。…（中略）…許されるんだけど、病気とか障害になると。だけど同時に自分をインフェリア（=inferior）な存在として規定してく、内面化してくってことと表裏一体なので。

―そのラベルを使わずに一つ一つ、

やろうとしてんです。（A さんヒアリング①）

2.6　小括

本章の最後に、シューレ大学がいかにして名前のない生きづらさに応じてきたかという観点で小括する。

シューレ大学は、不登校を個人の問題とすることに対抗してきた不登校運動の流れを汲んでおり、はじめから生きづらさを個人化する回路を相対化できる素地があったと言える。また、講座や自分研究、スタッフやアドバイザーの存在等、生きづらさを社会との関連で捉えられる機会が少なからずあり、学生らによっても創られてきた。

シューレ大学はイベント名や書籍等において「世界を自分に取り戻す」(図 2)「生きたいように生きる」という言葉をしばしば用いる。また、選べる自由さではなく、自分を起点に他者と創っていける自由さが大事にされていること（2.3.2）や、2.4.1 で見た「働く」をめぐる困難からも、「自分から始められない、世界が遠い」「自分が自分であれない」という生きづらさ観がうかがえる。そうした生きづらさについて学生らが行っているのは、自分と世界・社会との関係性へのアプローチと言える。例えば、2.3.2 で見たような自分研究や、模索期の学び創りそのものは、自分と世界との関係の絡まりを解明し、新たな関係を一から創っていく試みである。大学自体の運営や、クライアントと直接的かつ固有の関係を構築していくパイロットプロジェクトもそうであろう。シューレ大学の学生らは、社会に流通する一律なハウツーをもって生きづらさに「対処」するのではなく、自分の手応えや実感を手がかりに、世界・社会との関係を再構築しているのだ。

他にも、生きづらさが具現化した際の工夫として、アルバイトの会では誰かが急に動けなくなった時にメンバー間で話し合って調整する等、個人ではなく複数人で対応する形が採られている。

名前やそれに基づく制度については、「不登校」や「ひきこもり」といった名前と同一化することなく一定距離を保って付き合っている。2.5.1 で述べたような制度の利用や資金集め、広報等の際には、名前を部分的に引き受けつつ、「自分たちのあり方を変えなくても使えるものだけ使う」「無理なら使わない」という形で、一人一人の固有性や自分から始まる学びという軸からぶれないように折り合いをつけている。

年表

年	シューレ大学　　Aさん	社会
1985	東京シューレ設立	
1992	東京シューレにボランティアとして関わり始める	バブル崩壊
1995	『登校拒否のエスノグラフィー』出版	阪神淡路大震災
		Windows 95
1998	設立準備委員会「吾輩の会」	NPO 法
1999	シューレ大学開設	
	韓国ハジャセンターとの交流	
2000	映画・映像プロジェクト	
	ソーラーカープロジェクト開始	
2002	ミュージカルプロジェクト（後の演劇プロジェクト）開始	
	研究発表会、演劇公演、常勤スタッフが増え 2 人になる	
2003	旧出張所へキャンパス移転	
		「ニート」
2007	第一回国際映画祭「生きたいように生きる」開催	世界金融危機
		iPhone 発売
2010	『閉塞感のある社会で生きたいように生きる』出版	「無縁社会」
	10 周年記念絵画展	
	株式会社創造集団 440Hz 設立	
2011	被災地支援活動の開始	東日本大震災
	第一回研究イベント「世界を自分に取り戻す」開催	
2016	TURN フェスへ参加	
2017	全国若者ひきこもり協同実践交流会へ参加	
2018	豊島区主催イベントにて演劇公演	ひきポス創刊
2019	シューレ大学 20 周年イベント開催	登戸・練馬事件
2020	TDU―零穿大学として独立	新型コロナ

第三章　YC スタジオの事例

次に、YC スタジオの事例を取り上げる。YC スタジオも当事者主体の生き方創りに取り組んでいるが、それ以前に「居場所」であることが第一義とされている。地域とともに、また、多種多様な生きづらさを抱える人に応える形で、活動が展開されてきたことも特徴である。

本章では、YC スタジオの設立背景、活動の経緯、社会への働きかけ、そしてヒアリングの中で浮上した「生きづらさ」への違和感について記述し、その上で生きづらさに関する YC スタジオのあり方を小括する。

3.1　概要

YC スタジオは、島根県松江市にある場および NPO 法人である。生きづらさを抱えた人々の「居場所」を掲げ、「手ごたえの感じられる」オルタナティブな生き方の創造を目指している。不登校の子どもの居場所「フリーダス」の OBOG が中心となって 2004 年に設立された。「YC スタジオ」とは“Youth Culture Studio”、すなわち若者文化工房という意味である。不登校やひきこもり、高校中退、精神障害や発達障害、シングルマザー等、様々な困難を抱える人が訪れ、利用してきた。

図 3　移転前の YC スタジオ（HP より）

YC スタジオの主な活動としては、居場所の提供、工房や農業、仕事づくり、親の会等がある。平日 11～17 時は YC スタジオの 1・2 階を、昼食を囲んだり思い思いに過ごしたりできる居場所として開き、随時相談も受け付けている。また、様々な創作活動・学びを企画し実施することができる工房や、松江市近郊の農家と連携した有機農業も行っている。利用者は、自分の作品をクリエイトショップで販売したり、産直野菜や弁当の販売、カフェ営業に従事し給与を得たりすることができる。「就労支援」「中間就労」の枠組みで行っている活動もあるが、ソーシャルファームと呼ばれる、働きづらさを抱える当事者主体の仕事づくりを志向している。さらに、当事者だけでなく親世代に対しても月に一回程度、似た体験を持

つ者同士の情報交換と学び合いの場を設けている。

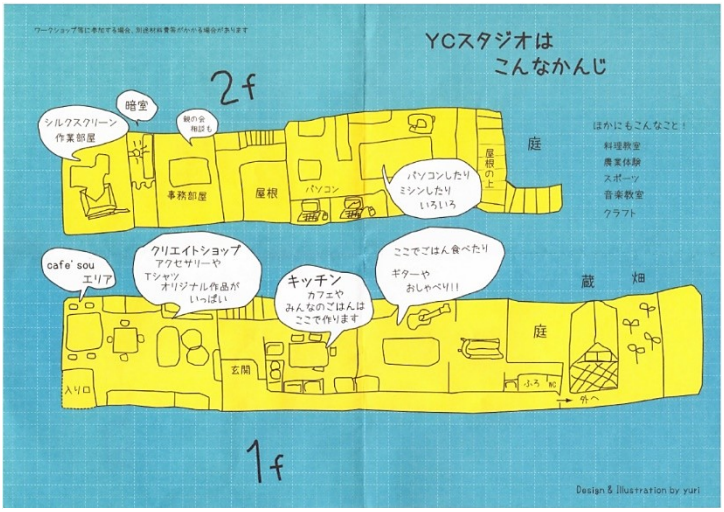

図 4　移転前の館内図

2005～2017 年には白潟本町商店街にある築 120 年の町家を借りていたが、宍道湖に注ぐ大橋川拡幅計画のため立ち退きを余儀なくされ、数百メートルほど南方にある 3 階建てビルへ移転することになった。町家時代には敷地内に庭や納屋があり、農作物を栽培したりギャラリーとして開いたりしていた。移転後はそれらができなくなったものの、シェアキッチンや国際交流等、新たな活動も始まっている。

助成金等をやりくりして運営されており、基本的に無料で利用できる（工房利用料は 1000 円/年）。2015 年度には居場所は延べ 1500 人ほど、工房は延べ 200 人ほどの利用があったが（島根県ひきこもり支援センター 2016）、移転してからは利用者が減少したという。

常勤スタッフは一人（E さん）で、適宜サポートスタッフやボランティア、有機農業や IT 教室等の際にはアドバイザーが参画する。

図 5　現在の YC スタジオの外観と 1 階（筆者撮影）

本研究では、設立時からのスタッフであるＥさん（70 代女性）にヒアリングを行った。Ｅさんには YC スタジオの HP から連絡を取り、ヒアリングは 2020 年 10 月 22 日、YC スタジオ 2 階にてカラスノエンドウとヨモギのお茶をいただきながら実施した。

Ｅさんは岡山県に生まれ、大学進学を機に上京。学生運動で動乱するキャンパスで大学生活を送った。その後、夫、長女、長男、次男とともに神奈川県葉山町で暮らしていたが、独居していた高齢の義父をサポートするため、1990 年、東京に仕事のあった夫以外の 3 人で島根県松江市に移住した。長男と次男の不登校をきっかけに、1991 年、同じ小学校の親 2 人と「松江不登校を考える会」を立ち上げる。やがて子どもの居場所（1992 年から「フリーダス」）も開設し、1997 年までスタッフ代表を務めた。そして 2004 年にフリーダス OB OG とともに YC スタジオを設立、現在まで理事長を務めている。他にも、子どもの人権オンブズパーソン（1996 年～）、日本児童青年精神医学会理事（2002～2005 年）、島根子ども若者の居場所応援ネットワーク（2017 年～）等の活動を行っている。

以下、本章で扱うＥさんの語りは全て同ヒアリングから得られたものである。

3.2　設立背景

YC スタジオの設立には、親の会「松江不登校を考える会（カタクリの会）」と不登校の子どもの居場所「フリーダス」の存在が大きく関わっている。まずはそれらの背景から記述していく。

3.2.1　我が子の不登校と親の会

1990 年、Ｅさんは 3 人の子どもとともに神奈川県から松江市へ転居することとなった。移住に踏み切った当時は、商店街があり人も優しいように見える松江に「こんないいとこはない」という印象を抱いていたという。

ところが、当時小学生の長男が転校後最初の登校日から泣いて帰ってきた。3 ヶ月ほどはまばらに登校を続けていたが、やがて行かなくなった。次いで次男も行かなくなったが、長女は泣きながらも通い続けた。

長男は中学校への進学は楽しみにしていたものの、入学式当日クラスの教室に入ってすぐに飛び出したという。しばらくは中学校の自学室へ通っていたが、そこにいることを知られると他の生徒に外から石を投げられるため、窓に半紙を貼る等の対策がとられていた。そのうち自学室へ通うこともつらくなり、「もう自分は絶対に学校に行かない。もう学校やめた」と言って登校をやめたという。

Ｅさんにとって我が子の不登校は想定外であり、「これは何だろう」「夢であってほしい」等、様々な気持ちが渦巻いていた。

子どもは学校行かんと泣いてるよね。なんでそうなったのかが全く分からないし、どうしたらいいんだろうということで、そういう、教育委員会がやってるような学校に戻すた

めの教室もあったんですけど、全然なんか違う感じ。誰にも相談できない。（E さんヒアリング、以下同様）

学校の教員はというと、E さんの長男の同級生を連れて、「この子たちは○○君のことこんだけ心配してる」と言い、花やケーキ、手紙を持って家を訪れる等、一方的な行為を押し付けてきたという。長男は教員らが帰った後、「もう泣きどおしだよね。ケーキとかぐしゃってやる」といった様子だった。

あとはもう大変で、宍道湖がすぐ傍にあるもんで、いつも宍道湖に走っていくからさ、もう私こうやって、…（中略）…夜もこうやって（抱きしめる）。

このように親子を追い詰めるものは学校だけではなかった。不登校に関する相談機関や専門家も、偏見に満ちた言説を広めそれに基づいた対処をしていたのだ。

教育委員会とかからもらう結構昔の資料持ってるんですけど、不登校の手引書みたいなのがあるんだよね（笑）。もう酷いことが書いてあって。昔どういう風に思われてたかって、「親の過保護・過干渉」とかさあ「自我の未成熟」とかさあ、いっぱい悪いことしか書いてないんだよね。それを三年生の子どもが見てね、こういうところすごく怒って、「こんなこと書くお前の方がよっぽどノータリンだ」って赤でチェック入れたのね。それを先生は持って帰って返してくれないの。

不登校児童の親の中にはカウンセリングにかかる者も多かったが、カウンセラーは親の話をオウム返しするだけで「ざるに水」のように感じられたという。さらに、精神病院に付属する分校や教護院（現・児童自立支援施設）の中には不登校の子どもたちを「弱い」と見なし、「強く」するために生ゴミを素手で触らせていたところもあった。そのことを指導員は全く隠すことなく、外部に語っていた。

専門家への不信感や息子自身が相談機関を拒否したこと等から、E さんはやがて、自ら全国の不登校に関する情報を集めるようになる。また、周囲にも自分と似た状況にある人がいるのではないかと考え、小学校の教員にその旨を尋ねた。「おたくだけですけ」と教えてもらえなかったが、半年ほど経った頃、PTA 役員を介して同学年の不登校の子どもの親 2 人とつながることができた。

そして、専門家ではなく「自分たちの体験の中から、こうやったら子どもがニコッとしてくれたとかお互いに学び合」いながら自分たちで考えていかないといけない、との思いを持って、親の会「松江不登校を考える会（カタクリの会）」が始動した。

3.2.2　子どもの居場所

ようやくつらさを共有できる仲間と場を得た親たちは、夜中や明け方まで不登校について学び語り合っていた。無論、日中に集まることもあり、子どもたちがついて来ることもあった。だが、小学生にとって親の会の活動は必ずしも楽しいものではない。E さんらは子どものための場が必要だと気づき、公民館の部屋を借りて子どもの居場所（のちのフリーダス）を始めた。子どもの居場所を掲げる場がそれまで全くなかったわけではなく、教育委員会や教育センター等によって設けられてはいたが、息子は「何で行かんといけんのか」と言い、場に辿り着く手前で「梃子でも動かな」かったという。

しばらくは公民館を利用していたＥさんらであったが、そこで憂き目にあうことになる。公民館は通えなくなった小学校の傍にあり、子どもたちはチャイムや校歌が聞こえてくるのを嫌がって隠れるようにして行っていた。すると、館内へもそのようにして入るためか、公民館の職員に「おたくの子たちは挨拶もせん」と言われるようになる。子どもなら誰でもしうる障子破りやノートへの落書きすらも「お行儀が悪い」と非難され、やがて部屋を貸してもらえなくなった。他の施設も、親には貸しても子どもとなると断るところが多く、居場所のメンバーは自前の場所の確保を目指すことになった。

借りられる場所を探すべく、E さんは息子とともに自転車で不動産屋を何軒もあたったが、不登校への偏見が強く悉く断られた。しかし、市役所近くの古い建物の、雀荘が夜逃げして空いた部屋をなんとか借りることができた。元雀荘であるため防音になっており、子どもが少し騒いでも問題ないだろうということだった。こうして E さんらは自前の場所を手に入れたのである。

フリーダスにおいてＥさんらは、「居場所」であることと「子どもたちがどうしたいのか」ということを大事にしていた。「居場所」については、登校拒否・不登校を考える全国ネットワークの合宿で E さんが耳にした、新潟で親の会を開く桜井裕子氏の「居場所」観を重んじていた。

> *とにかく子どもが来ても来なくても、最初誰も来てくれないから、あったかいコタツをやってお茶を沸かして、じっと来ても来なくても待っている、それが居場所なんだよっていうことをそのお母さんが言って、「ああ、そうなんだなあ」みたいな。だから、ああせいこうせいじゃなくって、来ても来なくてもずっと開けてあったかいものを用意して待っているっていう。そこだったのよ。*

実際、三年間一言も発さず、外での食事も全くできないながらもフリーダスへ来続けた子がいたという。また、Ｅさんの子どもも、学校へ通う長女、家にいる長男、フリーダスへ来る次男、と三者三様であった。このように、来るか来ないかにかかわらず開けてあるという事実と態度が重要だったのである。ところが、現在の不登校に関する活動の全国的な潮流は、シェルターとして場が必要とされた文脈や「居場所」というあり方を失っているという。

最初もうシェルターみたいに、隠れ場みたいに（子どもたちはフリーダスに来ていた）…（中略）…
もう子どもたちは「学校」の「が」の字のつくものも嫌、全部捨てた。なので「学習支援」なんてとんでもないですよ。その前に子どもたちが、今もそうだと思うんですけど、学校の中でどれだけ傷ついて、学校行かないことに対する偏見でどれだけそのまなざしで傷ついて、そこでしょ！っていうか。そこを抜きにしてなんですぐ「学習支援」とか言って…（中略）…それで私全国ネット（=フリースクール全国ネットワーク）も抜けたんですよ。「学習支援」とか「フリースクール」ばっかり言ってて、フリースクールの前に「スペース」やろって、居場所が原点なの忘れたのかって。

もう一つの「子どもたちがどうしたいのか」という指針については、次のように語る。

親の会も子どもたちの居場所も、とにかくもう自分たちで考えるしかなかったし、それから、子どもがどういう思いをしてるかってのを、聞いたら答えてくれないけど、子どもたちの言ってることはすごく本当だなと思ったわけよね、本当にどの子も。言葉数は少ないけど。…（中略）…子どもから学ぶっていうか、子どもはどう思ってるかってことが一番大事だよねっていう。

フリーダスでは、例えば「スキーに行きたい」という声が上がれば、子どもたちが行き先やスケジュールを決めることを大人たちでサポートしていた。ゲームや漫画、PC、野球道具等も、伝手を使いつつ導入していった。また、子どもたち自身も自ら決めていきたいという志向が強く、「フリーダス」という居場所の名付けや通信の発行も子どもたち主体で行っていた。さらには、中海干拓・淡水化事業[17]について八束町（中海の島々が属する）の町長にインタビューをして冊子にまとめたり、不登校の子どもが大人たちに向けて不登校を語るといったシンポジウムを企画したり等、活発に活動していた。E さんは「そういうのが嫌な子は来ないし、良かったのか悪かったのか分からんけどね」と前置きしつつ、当初シェルターとしての側面が強かったフリーダスが、子どもたちの主体的な活動の拠点へと変化していったことを語った。

3.2.3　YC スタジオ設立

フリーダスが始まって数年も経つと、初期からいる子どもたちの年齢も上がってくる。「今度は学校行くか行かないかっていう話ではなくて、どうやって生きてくのかとか働くのかとか、大人になると、やっぱ着地点みたいなのも考えるわけよね」と E さんは語る。と

[17] 2002 年に事業は中止となった。

はいえ、一人でその先の生き方を考えることは苦しく、思うようにも進まない。そこで、不登校の〈その後〉に突入した人々は、自らの居場所と様々なことを試す場所を欲した。

思いっきりやれる場所がないので、仕事にするとかっていう以前に思いっきりやりたいことがやれる場所が欲しい。で、それから「働く」っていうことは何だろうっていうことで、仕事になるかならないかみたいなところも含めてやりたいなっていう。

また、YC スタジオ設立の背景として、ハジャセンター[18]をはじめとする韓国の実践の存在も大きいという。

韓国との縁はフリーダスの通信に端を発する。フリーダスでは子どもたちの作った通信を広島県の家族社（のちの「ひろしま女性学研究所」）に送っていたのだが、それが家族社のメンバーで韓国に移住した人の目にとまり、そこから韓国の「代案教育」（オルタナティブ教育）に関わる人々との交流が始まった。1998 年には、代案教育関係者なら誰もが知る雑誌『ミンドゥルレ』にも取り上げられた。

当時の韓国は受験競争が過熱しており、また 1997 年の IMF 通貨危機によって雇用情勢が大きく揺らいでいた（山下 2019）。こうした社会状況を受け、「サイバー・ユース」という、青少年の声を聞くための調査サイトがソウル市・延世大学により立ち上げられ、のちのハジャセンターへと繋がっていく。そして 1999 年、仁川（インチョン）の非合法酒場で数十人の青少年が亡くなる火事が起こった。彼ら彼女らの多くは不登校（韓国では「辞退生」）であり、学校にも家庭にも居場所がない若者の存在を知らしめる出来事となった[19]（若者の社会的包摂研究会 2011）。同年の年末に開設されたハジャセンターはこのことにも影響を受けており、この年の年号を部屋の名前にしたり追悼イベントが開かれたりしている（同上；シューレ大学国際映画祭 2008）。

フリーダスとハジャセンターとはサイバー・ユース時代から交流があり、ハジャセンターの畳敷きのスペースはフリーダスの影響を受けているという。フリーダスのメンバーも、松江にハジャセンターの小型版のような場所があると良いと考え、松江市教育委員会（以下、市教委）へ働きかけていった。市教委もソウルへ視察に行く等、前向きな姿勢で、「公民館は高齢者の利用はあるものの若者がのびのびと活動できていないため、若者がやりたいことをできるような場所を作りたい。委託をするのでぜひ NPO を立ち上げてほしい」と E さんに言っていたという。ところが、教育委員会生涯学習課の管轄だった建物が市民活動センターに変わったことで、この案件は、非行を主な対象とする県警管轄の青少年支援センター[20]と抱き合わせになってしまった。このことで委託の話はなくなってしまったが、E さんら

---

[18] 正式名称は、ソウル市立青少年職業体験センター。

[19] E さんがこの事件の存在を筆者に教えてくれた。

[20] このことは県警サイトの階層構造からもうかがえる（島根県警察 2020）。

はボランティアで新しいセンターづくりに参画した。その名残は、現在でも「音楽＆ものづくりスタジオ」として市民活動センターの中に存在する。

とはいえ、受託するつもりで準備をしていたため、自分たちは自分たちで物件を借りて居場所と模索・実験の場を作ろうということになった。「私は（フリーダス OBOG に）乗せられて黙ってりゃいいってことで」E さんが理事長に、理事にはフリーダス OBOG の若者らが就き、2004 年 YC スタジオが設立された。

3.3　経緯

3.3.1　層の広がりと連携の模索

初めは不登校経験者が主に集まっていた YC スタジオだが、徐々にその層は広がっていくことになる。

当時、松江では路上ライブや流しが流行しており、若者がギター等を持って街中を徘徊・たむろしていた。YC スタジオはそうした青少年や家出している若者に声をかけていった。やがて彼ら彼女らのたまり場のようになり、ギターが 10 数本も置かれていた時期もあったという。中にはまともに食事を取れていない者もいたことから、昼食を作って共に食べるという取り組みを始めた。

また、非行傾向のある者や、家庭や学校に居場所がないために帰ろうとしない者もいた。口頭で注意しスタジオを厳重に戸締りしても、夜間に無断で入ってくることがあった。そこで YC スタジオに若者向けシェルターの機能を持たせることにし、2006 年に島根県との協働で「青少年のための駆け込み寺（シェルター）事業」を始めた。その枠組みを通して、泊まり込むスタッフ 2 人の人件費や寝具・風呂の修繕費を県から調達した。

泊まりに来る若者らは、音楽活動を親に容認されず家出した者から、幼少から劣悪な家庭環境に置かれてきた者まで、様々な事情を抱えていた。ある時は、若者の母親が娘を連れ戻しに YC スタジオへやって来て、建物の前で「追いかけっこ」が発生したこともあった。娘は母親の登場で過呼吸になり、母親は警察を呼び、YC スタジオにいた他の少年らも攻防に加わって、大変な事態になったという。「やっぱりあそこ（=YC スタジオ）はちょっと、ってずっと思われてたと思うよね」と E さんはこの時期を振り返る。

2008 年、クッキングハウス代表の松浦幸子氏を招き講演会を開いたことにより、YC スタジオの多様性がさらに増していった。クッキングハウスとは、東京・調布にて精神障害を持つ人々が食事づくりを介して交流する活動を行っている団体である。この講演会には松浦氏の話を聞こうと松江の精神障害当事者が多く訪れ、そのことをきっかけに YC スタジオ自体にも来るようになったという。

このように YC スタジオには、当初の予想を超えて様々な困難を抱えた人がやって来るようになり、E さん曰く「本当に生きづらさ一般みたいな感じ」になった。来る者を拒まない YC スタジオのような「居場所」では、自傷他害、例えば自殺企図や自傷行為、性に関わること、ハラスメント等のトラブルが「大なり小なり」起こりうると E さんは言う。

その辺は本当に大事なことで…（中略）…ガチガチに管理しないでやるのはどうしたらいいのかということで、それも命に関わったりするので、その辺もねすごく大変でどうしていいかわからないっていうのは凄くありました。

こうした問題の手がかりを求め、E さんは外部の様々な学習会に参加してきた。また、試行錯誤や悩みを他の活動主体と分かち合おうと、2017 年には「島根子ども若者の居場所応援ネットワーク」を立ち上げ、民間・草の根の県内 10 団体・個人との連携を模索し始めた。

学習会に参加して、自身の「当事者でもなく支援者でもない」という立ち位置を改めて実感したこともあった。ある会ではロールプレイングの時間が設けられており、その時のことを E さんは次のように語る。

ロールプレイやった時にすっごいみんな上手なのね。専門家のお医者さんとか看護師さんとか見るとすごい上手なの。当事者サイドのとか、お母さんの役とかなっててすごいんだよね。はー、と思って。私こっち（当事者サイドの役）やらしてくれなくて、カウンセラーかなんかの役をやらされて全然できなくて！一言も喋らなくて。私、絶対支援者の側には立ち切れない、あのロールプレイはさんざん、できない。…（中略）…なんであの人たちはあんなことがうまくできるんだろうって思ってね。

一方で、支援者―被支援者という立場・関係を前提にしない学習会もあった。その一つが「きらりの集い 2019 in しまね」である。このイベントは、ピアサポートとリカバリーをテーマに精神障害等の当事者や専門職が立場を越えて対話しようというもので、WRAP（元気回復行動プラン）やリカバリーカレッジ、当事者研究や哲学カフェ等、様々な分科会で構成されていた（きらりの集い 2019 in しまね実行委員会 2019）。

3.2 や 3.4 にあるように「専門機関で痛い目に散々あって」きた E さんは、それまで専門家に対して不信感を抱いていた。しかしこのイベントでは、専門家の中にも「支援者ヅラについてすごく『そうでなくありたい』って思ってる人たち」がいるのではないかと感じたという。当事者サイドの人のみでの活動に行き詰まりを感じていたこともあって、E さんは専門家とうまく連携していく可能性を考え始めた。

そこで同年、福祉医療機構の助成を受け、「きらりの集い 2019 in しまね」で出会った鳥取・岡山ダルク代表の千坂雅浩氏やソーシャルワーカーの原敬氏等を招いて、「専門家と当事者による連続学習会」（全 6 回）を主催した。現在（2020 年 10 月）は学習会の記録をまとめている最中で、今後もこうした取り組みを発展させながら続けていく予定だという。

3.3.2　仕事づくりの挑戦

YC スタジオでは仕事づくりに関しても様々な試行錯誤がなされてきた。

3.2.3 で述べたように YC スタジオは、仕事になるか否かに関わらず、やってみたいことを試すことのできる場であり、同時に、生計の立て方を他者とともに考え、実験することのできる場でもある。そのため、YC スタジオにはいわゆる「働く」ことに関して苦しみやままならなさを感じている人や、就労ありきの支援制度に合わなかった人が多くやって来る。現在仕事に就いておらず今後もすぐには働けない人もいれば、アルバイトや作業所で働きつつも、そのつらさを E さんに話すことでなんとか日々を過ごしている人もいる。就労継続支援事業所や地域若者サポートステーション、ハローワークを利用していたが、やがて行けなくなったという人も少なくない。

既存の就労支援制度が当事者の苦しみに対応できないことについて、E さんは「それはやっぱり本人を元々数少ない職種の中に押し込めることしかやってないので」と述べ、「パラダイムの逆転」が必要だと考えている。

別様のパラダイムとして E さんが以前から模索しているのが「ソーシャルファーム」である。ソーシャルファームとは、1970 年代にイタリアのトリエステで始まった仕事のあり方で（寺島 2008）、E さんの表現を借りれば、「当事者が仕事をつくる段階から」参画し「自分のできることを自分のできる形で」行うものである。「社会的共同組合」とも呼ばれており、株主に配当を払う必要もない。また、中間就労では一般就労に比べ給与が低く設定されるが、ソーシャルファームでは給与も対等である。E さんはドイツのソーシャルファームを現地視察したことで、日本の労働の枠組みが相対化されたという。

このソーシャルファームを目指して、YC スタジオではこれまで食や農、アートを中心にした仕事づくりが試みられてきた。2018 年の移転後には飲食店営業許可の取得に苦戦したり、消防が厳しく近隣の空き地でお菓子を売ることができなかったりと、新たな困難にも見舞われたが、形を変えながら 7 年間挑戦が続けられてきた。並行して E さんは、精神保健福祉の関係者にソーシャルファームの考え方を紹介し「立場を変えて」見て考えるよう働きかけたり、ソーシャルファーム事業を企画して助成金に応募したりもしてきたが、「なかなかうまくいかなかった」という。しかし 2020 年、コロナ禍をふまえたソーシャルファーム事業を企画したところ、「ソーシャルファームの実現は大変だろうが可能性も感じる」と評価され、助成金の申請が通った。この新たな挑戦は 2021 年 1 月から始まるという。

3.4 「生きづらさ」という言葉のぼかすもの

3.4.1 E さんの社会運動

E さんは YC スタジオに関わるのと並行して、何年にもわたり様々な社会運動を行っている。それは E さん自ら問題に気がつくこともあれば、YC スタジオでの出会いをきっかけに問題と遭遇することもある。

3.2 で見てきたように、1990 年頃から E さんは不登校に関する活動をしていたが、その関心はやがて子ども全般に向いていった。

不登校できない子もいっぱい苦しい思いしてるんで、それに（対して）何もしないでこっち（=不登校の子どものこと）だけでもなんかね。私こう、性分として済まなくて。

子どもの権利条約が日本で批准された 1994 年頃、不登校の親の会のネットワークの中には情報公開制度を使って子どもの権利に関する行政等の動向を調べるグループがあった。島根でも同様の活動を行おうと E さんは「子どもの人権オンブズパーソン」を立ち上げる。さらに、文部科学省から県教委に出向していた職員と協力し、教員暴力に関する調査の様式を作ったこともある。性暴力についても、被害女児への聞き取りの際に威圧や二次加害が起こらないよう、調査の場の設計を取り仕切った。

同様の問題は他にも、児童自立支援施設や児童養護施設、特別支援学校、精神病院思春期病棟で発生していた。こうした機関に対する取り組みの中で、調査への圧力や加害の隠蔽、それに対する内部告発、二次加害者の昇進、事前告知ありの形骸化した施設立ち入り調査等、様々な事態を目にしてきたという。そのような中でも E さんは、児童福祉法に施設内虐待の防止を盛り込むことや、施設内虐待の通報や施設への立ち入り調査の仕組みづくり、子どもの権利条約の冊子の製作等に寄与してきた。こうした子どもの人権オンブズパーソンの活動は現在も続けられている。

また、精神医療の薬物療法の問題にも取り組み、2002 年には当事者サイドとして初めて日本児童青年精神医学会の理事となった。

まな板の鯉（=当事者サイド）も口がついてるから喋らせてくれ、っていうことで理事になりましたみたいな。

多剤大量処方、および本人の同意のない入院や治療をやめさせることが E さんの大目的であった。

学会では様々な苦難があった。例えば、抗うつ剤パキシルを 18 歳未満のうつ病患者へも使用できるようにという要望書（日本児童青年精神医学会 2005）が、理事会へかけられずに厚生労働省に提出された。また、E さんが少年院・鑑別所からの青少年の社会復帰問題を担当した際には、向井義氏の少年院における発達障害者への矯正プログラムを紹介され違和感を覚えたが、専門家らに囲まれる学会の中でその違和感を強く示すことは難しかった[21]。

その一方で、薬物療法に関する委員会や「子どもの権利と法に関する委員会」の設立、シンポジウムの実施、子どもに対するインフォームドコンセントのガイドライン製作に参画し、事態を前進させることもできた。そうして 2005 年に任期を満了した。

他にも直近では、精神病院の長期入院をめぐる攻防がある。2019 年、映画『精神病院のない社会』上映会（YC スタジオ主催）をきっかけに、数十年閉鎖病棟に入院させられてい

[21] 後に向井氏は特別公務員暴行陵虐罪で逮捕・起訴された（日本経済新聞 2010）。

る人やその家族とのつながりができていった。聞いたり頼まれたりすると放っておけなくなるという E さんは、精神病院や医師のもとへ同行し、減薬や退院を認めさせる等してきた。その後の元入院患者の経過を家族へ聞くと、薬の離脱症状には苦しむものの、徐々に摂食や排泄の機能、言葉や記憶が回復していったと語るそうだ。

E さんがこの件に熱を入れるのは、彼ら彼女らがしばしば、学校で痛ましい目に遭い不登校となった過去を持つからでもある。我が子は薬を全く飲まずにきて、楽な暮らしではないながらも今も生きているが、もし親の会や勉強会をしていなかったら、時代がもっと前だったら、と E さんは考えるのである。

このように、E さんは様々な問題に気がつき、時に遭遇し、様々な機関における人権侵害と闘ってきた。これまでの運動・抗議に加えゴマがすれないので各方面から嫌がられているだろうと語る E さんだが、「話がわかる人もいるので、全く切ってしまわないで関係を持ちながら、彼らの良心とかなんかに訴えかけていくっていうのもありかなと思うんですよね。まあ負けますけどね。」とも述べている。

3.4.2 「生きづらさ」への違和感

こうした社会を変えるための行動を振り返った後、E さんは、筆者の手渡したヒアリング趣意書の「生きづらさについて考えてこられたこと」という文言を見ながら「生きづらさ」という言葉への違和感を口にした。

悔しさとか、このままで死ねないとか。なんか私「生きづらさ」とかっていうよりもなんか強い思いがある。「このままではいられない」みたいなところで、やってきたかな。

その後、「生きづらさ」という言葉が「居場所」同様に出回っていること、様々な「診断名」が流行っていることを話し合う中で、E さんは「なんか結局自己責任、結局個人の中の問題に閉じ込めるような気がするんですけど、私。」と違和感を述べた。そして話は当事者研究にも及ぶ。

E さんはべてるの家の当事者研究の、依存症者の飲酒や統合失調症による幻聴・妄想を否定しない世界観に面白さを感じ、一定の関心を持って当事者研究の動向を見てきた。名古屋での当事者研究全国交流集会に参加したことや、当事者研究についての研究室がある東京大学駒場キャンパスを訪れたこともある。そこでは、当事者研究の研究をしている専門家により、当事者研究は自助会と当事者運動の潮流を汲んでいるとの解説がなされていた。しかし、青い芝の会[22]や前進友の会[23]等の当事者運動を知る E さんは、当事者研究の研究に対して「うーん、どうなんだろう」「(社会変革のために) 戦ってない気するけどね」と感じてい

[22] 脳性麻痺者による当事者運動団体。

[23] 精神疾患・精神障害の患者会。

る。

生きづらさがどうのこうのって、いやそういうなんか上品な話じゃないような気がする。

3.5　小括

本章の最後に、YC スタジオがいかにして生きづらさを個人化せず、受け止めてきたかを小括する。

YC スタジオは、子どもの居場所フリーダスの OBOG の「居場所」兼自分たちのやってみたいことを行える場所として誕生した。利用者の属性を問わず、大原則として「居場所」、つまり、利用者に何らかの目的に沿うことを求めない場として開かれてきたことで、その後、制度や枠組みから漏れ落ちた人や家庭内に抱え込みがちな困難を持つ人、地域で孤立している人等、様々な生きづらさを抱える人がやって来るようになった。YC スタジオは、そうした人々の困難やニーズに応じていく形で、資源を調達し、活動を展開してきたと言える（3.3.1）。

E さんは、不登校を個人の問題とすることに抗してきた不登校運動の経験者であり、生きづらさの個人化については絶えず問題意識を持って来た。また、様々な生きづらさを抱える人と現場で出会う中で、その度に「放っておけない」という思いを持ってきた（3.4）。そのため、E さんは生きづらさを社会や環境の問題と捉え、様々な機関や制度に働きかけたり（3.4.1）、YC スタジオで当事者を起点とした仕事づくりに取り組んだり（3.3.2）してきたのである。

また、被差別や被抑圧、人権侵害等の問題に取り組んできた E さんは、「生きづらさ」という言葉そのものが社会の問題を見えづらくすることを危惧し、「生きづらさ」と表現することに慎重な姿勢を取っている（3.4.2）。

年表

年	YC スタジオ　　E さん	社会
1990	転校後、長男・次男が不登校に	
1991	「松江不登校を考える会」設立	
1992	子どもの居場所を設立（のちの「フリーダス」）	バブル崩壊
		阪神淡路大震災
		Windows 95
1996	子どもの人権オンブズパーソン開始	
1998	『ミンデュルレ』にフリーダスが紹介される	「ひきこもり」
	韓国のハジャセンター等との交流	
2002	日本児童青年精神医学会 理事（～2005 年）	
2004	YC スタジオ設立	「ニート」
2005	町家の古民家を借りる	
		世界金融危機
2008	クッキングハウス松浦氏の講演	iPhone・Twitter
	蔵を改修し「スペーストカトカ」に	
2009	アート展『Diary in art-マグマたちの噴出』	
2011	郊外の畑で農業を始める	東日本大震災
		教育機会確保法
2017	「島根子ども若者の居場所応援ネットワーク」設立	
2018	町家から現在のビルへ移転	
2019	専門家と当事者による連続学習会を主催	
		新型コロナ

第四章　なるにわの事例

続いて、1.2 でも言及したなるにわの事例を取り上げる。なるにわは第一に「居場所」を掲げ、場の目的性や凝集性が高くならないように保たれている。場の開かれる頻度は多くても週 1 日程度で、企画によっては場所も変わりうる。場としての制度利用をしていないことも特徴だ。

本章では、なるにわの設立背景、活動の経緯と内容、そして場の立ち位置について記述し、その上で生きづらさに関するなるにわのあり方を小括する。

4.1　概要

なるにわは、NPO 法人フォロが運営する「『なにものか』でなくともよい場所」であり、大阪府大阪市に拠点を置く。趣旨と規約に賛同する 18 歳以上であれば、属性に関係なく誰でも参加することができる。2006 年に若者の居場所「コムニタス・フォロ」として設立され、2014 年に参加者とともに「なるにわ」として立ち上げ直された。

主な活動としては毎週土曜日のサロンがある。フォロのスペースが 14 時から 21 時まで開かれており、途中参加・退出自由となっている。サロンでは夕食を共につくって食べており、毎回概ね 10 名前後がやって来る[24]。また、月に一度「生きづらさからの当事者研究会（通称・づら研)」という、テーマをもとに自分の生きづらさを他者へ開き「研究」する会が行われている。場所は外部の会議室等を借りることが多い。こちらも 10～20 名ほどの参加があるが、メンバーは必ずしもサロンと重複しない。その他にも参加者やゲストの発案で、「なるにわラジオ」や「ひきこもるデー」、生きづら短歌会、「くさ研」や「やす研」等、様々な活動が行われてきている。そのさまは「いろんな枝葉がしげったり落ちたり」と表現される。

属性を問わないこともあり、参加者の賃労働のしている・いないや診断名の有無、不登校経験の有無等は様々である。20～30 代の参加者が多いが、40～70 代の人もいる。

なるにわでの過ごし方は基本的には自由だが、場を「庭」や「空き地」のように保つため、他の人の発言を否定はしない、質問をされても答えたくないことには答えなくて OK、お酒を飲んで参加しない等の簡単な「作法」はいくつか設けられている。

場のコーディネーターは一人（K さん）であるが、参加者も何人かで「お庭番」という役割を担っている。づら研には社会学者の貴戸理恵氏もコーディネーターに加わっている。

---

[24] 現在は新型コロナウィルス感染防止のため、開室時間を 14 時から 18 時とし、夕飯づくりを休止している。

図 6　フォロの内観（なるにわの Facebook より）

本研究では設立時からのコーディネーターである K さん（40 代男性）にヒアリングを行った。K さんには Facebook から連絡を取り、ヒアリングは 2020 年 8 月 10 日にフォロのスペースにて実施した。

K さんは、1992 年に学生新聞の取材で東京シューレを訪れたことをきっかけに、「学生ゼミ」[25]参加者として、その後ボランティアとして東京シューレに関わるようになり、大学中退後の 1996 年からスタッフとなった。また、「不登校新聞」の編集長を 1998 年の創刊時から 8 年半ほど務めた。2000 年、新聞の編集部の大阪移転に伴って K さんも大阪へ拠点を移した。2001 年には、「学校に行かない子と親の会（大阪）」[26]の有志とともにフリースクール・フォロを立ち上げ、現在まで事務局長を務めている。そして 2006 年、若者の居場所コムニタス・フォロ（現・なるにわ）を設立した。他にも、「不登校 50 年証言プロジェクト」の統括や、「多様な教育機会確保法案」（現・教育機会確保法）に関する問題提起、大学の非常勤講師等、様々な活動を行ってきている。

文献を示すにあたり、K さんの本名が分かる箇所があるが、K さん本人の同意のもと記している。

4.2　設立背景

なるにわの前身「コムニタス・フォロ」は、第二章・第三章の事例とは異なり、不登校のその後を生きる人々の直接のニーズからというよりは、K さんの複数の問題意識から始まった場である。

1980 年代頃の不登校運動は、不登校を個人や家庭の問題とする見方に対して「不登校は病気じゃない」と打ち出し、学校や社会のあり方を問う方向性で展開されていた。そうした

---

[25] 東京シューレ主催の、東京シューレの子どもたちと外部学生が議論をする学習会。

[26] 京都の「学校に行かない子と親の会」の一部参加者が大阪にて始めた会。

運動と連動する形で、不登校の子どもを受け止めようと居場所や学び場も作られていった。そうした場が「フリースクール」を名乗るようになり、「不登校を選んだ」「不登校でも人並みに生きていける」といった論理で、学校を相対化しようとしていった。

ところが時代が移り、「不登校のその後をどう生きるか」や「学校や社会のあり方は変わったのか」等の点において、それまでの運動の枠組みの限界が見え始めた。K さんもそれらを肌で感じており、不登校のその後、および運動のその先について考えなければならないと思っていた。

この思いに拍車をかけたのが、貴戸理恵氏・常野雄次郎氏の著書を発端とする一連の議論・反応である。2000 年代半ば、両者の『不登校は終わらない』と『不登校、選んだわけじゃないんだぜ！』によって不登校運動の批判がなされ、関係者の間で物議を醸すという出来事があった。二者の問題提起は、K さんにとっては自らの問題意識をクリアにする一助となったが、不登校運動を担ってきた関係者にとっては受け入れられがたいものがあった[27]。K さんは当時の状況について次のように語る。

> *あそこで出された問題提起は炎上のようなかたちになってしまって、問いかけた問題の本丸の部分での議論はなくて、不毛な議論に終始してしまっていたように思います。*（不登校 50 年証言プロジェクト 2018）

常野氏から「一連の出来事について議論してほしい」という投げかけが、不登校新聞（当時は『Fonte』）の読者メーリングリスト内であったが、あまりの炎上状態に、K さんは不登校新聞上で取り上げることができなかったという（杉本 2019）。この常野氏の投げかけに応答できなかったとの思いが K さんの中には強く残っていた。

さらに、不登校に限らない若者をめぐる社会状況にも問題意識を持っていた。バブル崩壊以降、若者の雇用劣化が著しく進んでいたにもかかわらず、当時は日本に貧困問題があることさえ社会的に認知されておらず、また、「ニート」「ひきこもり」へのバッシングも噴出していた[28]。K さんは「ニート」「ひきこもり」に、「不登校」が辿ってきた経緯の相似形を見出し、若者全体の困難についても考える必要があると思っていた。

2006 年、K さんは不登校新聞の編集長を退いた。それは不登校新聞の経営的な事情によるところが大きかったが、上記の問題意識も理由の一つであった。そして、フリースクールの延長としてではなく新たな枠組みで他者とともに考えていきたいと、同年、コムニタス・フォロを開設した。

---

[27] 例えば東京シューレは、『不登校は終わらない』について貴戸と出版社に抗議を行った。

[28] 1990 年代末から「ひきこもり」は取り沙汰されていたが、それが「ニート」という言葉の流行を経て、働いていないことの問題へと回収されていった。

4.3　活動の経緯と内容

4.3.1　日常を共有する場へ

設立当初は、隔週～毎週で行われるテーマトークや映画鑑賞会等が主な活動であった。テーマトークでは、参加者の発題を受けて、働くことや食べ物をめぐる問題、裁判等について話し合っていた。

また、「聞くプロジェクト」「現場プロジェクト」という企画もあった。樹木医やチンドン屋、僧侶に話を聞いたり、ゴミ埋立地や保健所（犬管理事務所）、刑務所、釜ヶ崎での夜回り等、現場を訪れたりした。この企画は社会の実情を知るだけでなく、様々な人が様々な世界を生きていることに触れ、参加者・K さんともに自らの世界の狭さや閉鎖性に気がつくような体験でもあったという（山下 2009）。

とはいえ、必ずしも生きづらさや社会について考えたい参加者ばかりではなく、「またそんな話か」といった反発もあった。

（テーマトーク等も）一定の意味はあったと思うんですね。それこそほっとくと「自分が悪い」って思い込まされてるので、そういう話をすることが、ある種見方を反転させる機会になるみたいなところがあって、そういうのを繰り返してたって面があったかなと思うけど。…（中略）…でも、一緒にご飯食べられたりとか、本当に何気ないおしゃべりができたりとか、安心して過ごせるとかいうことがあればいいっていうニーズもあるわけですよね。（K さんヒアリング、以下同様）

そのような中で主な活動の一つになっていったのが、食事づくりである。文字通り参加者がともに食事を作って食べる時間であるが、献立決めから買い出し、調理、片づけまでを皆で話し合いながら行う。皆で分けるため一食 300 円ほどで食べることができる。これが現在のサロンとその後の夕食づくりへとつながっている。

また、企画の中にも目的や意味を求めないものがあった。例えば「ゆる企画」では、「人生ムダこそ大事」をモットーに、京橋駅の広場に半日ただ座り続けたり、大人だけで公園遊びをしたりと、様々なゆるい企画が不定期で行われた。

結構いろんなことやってて。あんまりね、意味を求めて目的的にというよりは、もう少し目的的じゃない、直線的じゃないほうがいいんだみたいな感じのことが、だんだん関わる中で私もそう思ってきたっていうのもあるし、なんか場としてそういう事の方が望ましいみたいな感じになっていった面もあると思う。

そうしたことが分かっていく中で、非目的的な場とテーマ型の場が棲み分けられていき、前者の中でも非言語コミュニケーション的な日常の場がなるにわのベースとなっていった。

4.3.2　テーマ型の場

一方、テーマ型の場としてなるにわで 9 年以上続いているものが、「生きづらさからの当事者研究会（通称・づら研）」である[29]。づら研はそれぞれの生きづらさを他者へ開き仲間とともに「研究」をする会であり、月に一回 4 時間ほどテーマをもとに話し合う。テーマは会の終わりに次回分を決めており、これまでに「イヤの研究」「怒られるのが怖い問題」「狭窄さんの研究」「見た目と自意識」等について話し合われてきた。「名前のない生きづらさ」もその一つである。

づら研も全国で行われている当事者研究実践の一つと言えるが、づら研ならではの特徴がいくつかある。まず、属性で参加者を絞っていないことが挙げられる。これは、診断名やひきこもり等の「名前」ではなく他者から見た状態でもなく、「生きづらい」という本人の主観・感覚から出発するためである。また、「生きづらさ“から”の当事者研究」であって「生きづらさ“の”当事者研究」ではないことも重要だ。「の」としてしまうと「生きづらさをどうするか」という問いの立て方になりがちだが、「からの」とすることで他者と共有し考え合いやすくなり、会の前とは異なる視野に辿り着く可能性にひらかれる。

これらの特徴について K さんは次のように語る。

> *どうしても名づけって、そもそも力関係とか「それをなんとかしよう」っていうまなざしとかが名前そのものに入っちゃってる。学校に行っていない状態を問題にするから「不登校」って名づけるわけだし、発達障害の場合もそうですよね。もちろん、名づけが意味を持つことはあるんだけれども、そうじゃなくて（＝ひきこもりや依存症、リストカット等の「現象」に焦点を当てるのではなくて）、もうちょっとこう内側から考えていった時に、横断的に、それぞれ分節化された形じゃなくて繋がれたり、そこから考えられたりすることがあるなっていう、そういうような試み。*

づら研の始まった経緯について、「べてるの家の当事者研究をならって始めたというよりも、自分たちの『生きづらい』という当事者性から研究してみようという意気込みだけで、取り立てて方法論があったわけでもなく、手探りで始めたように思う。」と K さんは振り返っている（フォロ 2019）。当初は、レポートを書いてきて発表し合う形や KJ 法のワークが行われていたが、それぞれやりづらさがあり徐々に廃れていったという。現在は、フリートークをしながら時々ホワイトボードにキーワードを書き出す形式が主となっており、「連想ゲームのように言葉の流れに場をまかせ」るようなところがある（同上）。

---

[29] づら研開始時はまだ「コムニタス・フォロ」であった。

図 7　まんがで紹介―づら研（フォロ 2013）

筆者は、2019 年 9 月に関西学院大学梅田キャンパスで開かれた「呪いの研究」の回に参加した。このテーマは同年 7 月の「聞く耳のあり方の研究」から派生したもので、人に聞いてもらえなかった思いが自分の中で「呪い」と化すのでは、というところから設定されたものだ。会場は小教室で、机は長方形の輪状に並べられ、皆の体が輪の内側に向くようになっていた。

はじめに、初参加の人には A4 表裏一枚のづら研の説明プリントが渡され、簡単な説明がなされる。また、机の上には「オフレコ」「ちょっと待った」「ジャッジはいりませんの」「発言させておくれ」「ズレてます」「ひと休みせえへん？」といったカードが置かれ、参加者が適宜挙げて見せられるようになっていた。

この日は K さんが参加者に適宜話を振りつつ、皆でフリートークをしていく形で進んでいき、貴戸さんが話の中で出てきたキーワードをホワイトボードへと書き留めてくれていた。休憩時間は、貴戸さんからのお土産のお菓子を食べたり、雑談したり、フォロの発行する冊子を買ったりしてそれぞれ過ごしていた。

休憩明けに貴戸さんから、宮地尚子氏の著書『環状島=トラウマの地政学』[30]についての簡単な解説と一部の音読があった。会の後半は、環状島モデルから想起された各々のエピソードが語られていった。最後に次回のテーマ決めを皆で行い、残った人で会場の机を元のスクール形式の並びに戻した。その後、有志のメンバーで近隣のカフェにお茶をしに行った。

---

[30] 「環状島」をモデルに、トラウマをめぐる関係者のポジショナリティと力動を描いた書籍。4.4.1 に図とその概要を記した。

また、テーマ型の場はづら研の他にもあり、不定期で学習会や読書会が開かれている。

筆者も K さんへのヒアリングの後、そのまま動物と人間との関係についての学習会に参加した。学習会が始まる数十分ほど前から参加者が徐々にやって来て、持参した昼食をとったり社会・歴史的な映画について話したりしながら過ごしていた。その後、その場にいる人たちで机や椅子の移動やスクリーンの設置等、学習会の準備を行った。参加者の中には、皆で食べる用にお菓子をいくつも持参した人もいた。

学習会の冒頭に K さんから、記録のために録音をするためオフレコの際は言ってほしいということと、つらくなったりしたら適宜休んで良いということがアナウンスされる。その後、ゲストの方がスクリーンを使いながら講義をし、それをもとに質疑応答やディスカッションを行った。命や生活に密接に関わるテーマだったこともあり、参加者同士の白熱した議論も起こった。学習会の後、議論に触発されて思い出されたエピソードを自然と話したくなる感覚があった。またこの日は、会の後にゲストの方がピアノを演奏してくれる時間があり、十数曲あまりをカーペットに座って聴いた。最後には残ったメンバーで部屋を原状復帰し、雑談しながら帰路についた。

4.3.3　参加費と場の運営

4.3.1 では、場が参加者のニーズや活動を通して醸成され、変わっていったことを記したが、参加費のあり方も場の実情に合わせて変わっていった。

設立当初は、場の運営を考慮して月額会費制を採っており、月 5000 円で 5 回ほど参加できるようにしていた。「どっちかっていうと所属感、会費を払って会員じゃないけれどもそういうような感じでやって」いたという。ところが実態に合わなかったため、この形が採られていたのは最初期だけである。よりゆるやかに、それぞれに合った関わり方ができるよう、1 回 500～1000 円程度をその都度払う形へと変更された。

また、金額の設定にも注意を払ってきた。

フリースクールだとどうしても「スタッフと子ども」って関係になるじゃないですか。…（中略）…「お金を払う側ともらう側」になるし、「仕事としてやる側、そこに参加する側」になる。もちろん子どもたちも「この場を自分たちで作るんだ」っていうことでやってはいるんですけど、だけどどうしてもそういう構図にはなっちゃう。…(中略)…でも、18 歳以上の人と関わっていくにあたっては、参加者から高額の費用をもらって、私が支援者として仕事として支援をしますよって構図にはしたくないと思っていて、それは最初からはっきりしてたんですよ。

参加費がある程度高額な場合、払う側の中で、参加費はサービスの対価として位置づけられやすく、支援者―被支援者という関係の固定化が起こりやすい。

一方で、無料・低額の場合もそれゆえの困難がある。K さんはブログで「手弁当パラドッ

クス」と題して次のように述べる。

費用が安かったり無償だったりすると、利用する側は、活動の理念にまで共感しているわけではなく、たんに安いサービスとして利用していることもある。そうであってもかまわないのだが、活動をしている側からすると、たんに安く利用されているだけという気持ちも生まれてしまう。活動する側が「ともに活動をつくりたい」と思っていても、利用する側からすると、それはひとつの道具でしかないということもある。…（中略）…
利用する側に、負債感を与えてしまうこともある。対価をきちんと払っている場合には、そこで決済されるはずのものが、無償だったり、手弁当でまかなわれている場合は、関係が非対称になってしまう。意図はしていなくとも、そこに独特の力関係が発生してしまう。
（山下 2019）

そのため、場所代や人件費[31]等、最低限かかるコストと労力の分だけ「けじめ的にお金をもらう」形になっている。こうした参加費のあり方については、コムニタス・フォロからなるにわへと変わった頃に特に意識したという。

このようになるにわは会員制を採っておらず、参加者から多くのお金を得ているわけではないため、多くの非営利活動と同様に経営的には厳しいものがある。K さんもその難しさを感じていたため、NPO のつながりの中でプロボノやマネジメントに関する講習を受けてはどうかと言われ、試みにアドバイザーに来てもらったことがあるという。その時のことを K さんは次のように振り返る。

「お金集めるんだったらビフォー・アフター（=「こうすると参加者はこうなる」[32]）をはっきりさせて、キャッチコピーとか写真とか使っていったらいいですよ」とかって言われたりするんですけど、そういうの大嫌いで、そんなまっすぐ行くわけないじゃないかって。そういうことはたいへん嘘くさい感じがしちゃうし。結果として、本人にとってそうなることもあるかもしれませんが、それを成果としてアピールして金集めるみたいなことにしたくないなって。…（中略）…やっぱ無理だなこういうのって思って

社会的に了解されやすいストーリーを提示した方が、資金は集まりやすいが、そもそもそうしたストーリーに乗らない人がなるにわに来ている面があるという。また K さんは、「そこ（場）に来ている人たちにとってどうなんだろうな」と、現実を短絡化したストーリーが場の参加者に与える影響を考えるのである。

---

[31] K さんはなるにわでの活動に対して月に 1 万円ほど支給されている。

[32] 例えば、「ひきこもっていた人が場に参加したことで就労に至った」のような語り方。

4.3.4　コムニタス・フォロからなるにわへ

2014 年、コムニタス・フォロはなるにわへとリニューアルされた。その経緯について K さんは、「どっちかっていうと頭でっかちな自分の問題意識からってところがあったので、もう一回立ち上げ直したいって気持ちがあったんですよね。」と語る。そのため、場の呼びかけ文も当初の K さんが書いたものから、参加者 2 人の考案した文を元にまとめたものへと変えられた。

なるにわという名前には、「なにものか」にならねばならないと感じさせる社会に対して、「何になってもならなくても良い」「なるようになる」といった意味が込められている。また、なるにわの「にわ」は庭に由来するが、ここには場がより「お庭」「空き地」的になればとの思いが反映されている。

お庭みたいな場所でふらっと来てくれたらよくて、そこに所属っていうんじゃなくて立ち寄れる場のひとつみたいなことで。来る人にも大体そういう風に言うんですけど、ここはそういうゆるやかなつながりの一つと思って…（中略）…複数関わりがあった方が望ましいと思うので、何かここだけがつながりの場っていう風にならない方がいいと思いますよっていう

このように、凝集性の高いコミュニティではなく、風通しの良い場が目指されてきたのである。

また、近年新しい試みも始まった。なるにわのコーディネーターは長らく K さん 1 人が務めてきたが（づら研を除く）、2018 年から参加者も「お庭番」という役割を何人かで担うようになった。お庭番は、波があっても良いので参加者が自分たちで責任を持ち、互助的に場を開く形にしようという趣旨で設置された。これも支援者―被支援者の関係にならないようにするための工夫である。

お庭番の人は、SNS でなるにわのスケジュールやお知らせを投稿したり、K さんのいない日（月に一回ほどある）にサロンの当番などをしたりしている。

しかし参加者は、自分の直面する問題で手一杯だったり不安定な状態にあったりするからこそなるにわを必要として来ている側面がある。そのため、気持ちはあってもお庭番を務めることが難しい時もあるという。

互助的な場として、自分たちで責任もって運営していくってしたいんだけれども、まあ、そういうことができる人ばっかりだったらそもそもこういう場は必要とされてない、みたいな。矛盾の中でやってるっていうのが正直なところ。…（中略）…うまくいく時期はあるんだけど、必ずしもそうでもないっていうところがあります。まあでも、そういうことひっくるめて、あんまり綺麗にいかないところも否定しないというか、そういうことが大事かなと思って。

ある程度「足場みたいなものができ」安定してお庭番を務めるようになった参加者は、そのような状態になると他の場へ軸足を移していくことが多い。K さんは、場の風通しや参加者本人の世界の広がりという点で、むしろその方が望ましいと考えている。

4.4　場の立ち位置

4.4.1　〈波打ち際〉に留まる

4.3.4 で、なるにわが人々の、自らのことで手一杯な状態や不安定な状態を受け止めてきた側面があることを述べた。そのような状態が個人やその家族の内に押し込められていることの問題性を、K さんは次のように述べる。

すごくしんどいとかそういうような時には、理性的だったり自立的な個人ではいられないところがあって。そういうようなものの持って行き場所がないっていう問題があると思うんですよ。そういうものの受け止め手が家族しかないっていうことが苦しい。家族だと閉じた空間になってしまって、暴力性を帯びてしまったりとか外に出せない問題になってたりとか、個人に閉じ込めちゃってるってことがあって生きづらい、みたいなことがあると思うんですけど、もう少しそういうものを開かれてる場で出せるようなことがあってもいいんじゃないかって思って。

理性的で自立的な個人であれないような「しんどい」状態というところから、筆者はづら研に参加した際に聞いた環状島モデル（宮地 2007）を想起した。そのことを伝えると、K さんは環状島モデルになぞらえて自らの立ち位置を話してくれた。

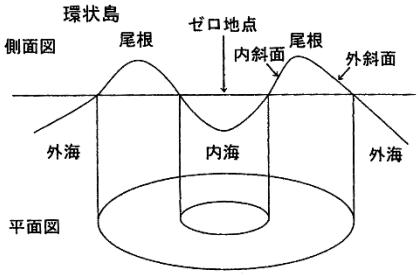

図 8　環状島モデル（宮地 2007: 10）

図 8 の〈内海〉とは、トラウマ的出来事からの距離の近い領域で、ここに沈む人々は言葉を失っていたり、人に了解される態度や表現ができなくなっていたり、究極的には亡くなっていたりする。そこから〈内斜面〉の陸地へ上がるにつれて、語ることができるようになる。〈外斜面〉まで行くと当事者性が弱まり、〈外海〉はそのトラウマの問題に関心を持たない人々の領域となる（同書: 11, 12）。

この〈内海〉と〈内斜面〉の狭間である〈波打ち際〉のような位置にいる人々を、なるにわが受け止めてきた感覚があるという。

真っ直ぐにはいかないですよね、〈内海〉から、〈波打ち際〉から〈尾根〉に行くのって。何回も〈内海〉に潜ったりまた〈波打ち際〉に出てきたりとか、〈尾根〉のほう行ったかなと思ったらまたこう落ちてきたり

その繰り返しには、人それぞれではあるものの、10 年ほどはかかる。なるにわの参加者の中にはコムニタス・フォロの初期からのメンバーもいるが、そうした人々が自然と他の場へ軸足を移していったのは、設立から 10 年以上経ったここ数年のことだという。そして、〈尾根〉や〈外斜面〉の方へ出ていく人がいれば〈波打ち際〉へ新しい人がまたやって来る、という巡りがなるにわのような場では起きるという。

このようになるにわは、人々の繰り返しや揺れを多分に含む非直線的な時間を、長期にわたって受け止めているのである。

しかし、〈波打ち際〉にいる人々を受け止める場、という立ち位置を取り続ける人は多くはない。不登校の子どもの居場所（の一部）も、その立ち位置を変えていった一例である。

4.2 で述べたように、不登校運動の一部は不登校を問題視するまなざしに対抗するため、「不登校を選んだ」「不登校でも人並みに生きていける」といった論理を採用した。その論理や、フリースクールの制度的位置づけを求める動きによって、不登校運動の作ってきた場は〈波打ち際〉を受け止めるアジールから、学校の代わりとなる選択肢へと意味を変えてきた。さらに前述の論理は、不登校への偏見の軽減等に寄与したと思われる一方で、不登校を「選んだ」とも「人並み」とも到底言えない状況にある人々や個人の中のそうした部分を、不可視化する作用も持ってしまった。つまり、元々〈内海〉や〈波打ち際〉にいるところから構築された実践が、社会変革のために採った方針と時代の変化によって〈内海〉領域から離れていったとも言える。（宮地の環状島モデルは、前述の通りトラウマに関して図式化したものであるが、不登校に関してここで述べているのはトラウマに限らない。）

加えて、〈波打ち際〉に立ち続けることは了解されやすいストーリーに馴染まないゆえに、経営的にも難しい。それでも今の立ち位置にこだわる理由について、K さんは次のように語る。

じゃあ自分はなんで立ち続けてるのかって、ちょっとうまく説明できないですけど。多分、そこに関わり続けて物事を考えて、そこから言葉にしていったりすることが、自分にとって必要なんだと思うんですけど。…（中略）…多分、その〈内海〉の重力みたいなものに引きずられてきたんだなって思います。それをスルーできなかったのかな。

また、それだけではなく、〈波打ち際〉に立ち続けること自体が長期的に見て「今の社会を揺るがすような『磁場』みたいなもの」になりうるとも感じているという。

無論 K さんは社会運動そのものを問題視しているのではなく、運動の目的とは別に〈内海〉〈波打ち際〉を受け止める場があるべきだと考えているのだ。

例えば「こういう法律がつくられようとしてるから、それに反対する」だとか、そういう政治的局面みたいなときに、必要なこともあると思うんですけど。でも変わらず、生きづらさみたいなものとか〈内海〉的なものとかっていうのは、誰しもの中に何かしらあったりして。そういうような事っていうのは…（中略）…多分どういう風に社会が変わっても残っていく

4.4.2　折り合いと「水脈」

K さんは、個人の生き方について、また場の運営について、「部分的に魂を売る」という戦略を提唱している。例えば環境負荷を考えながらもやむを得ず石油を使う時、例えば給与のために既存の社会構造を再生産するようなビジネスに携わる時、我々は「部分的に魂を売っている」と言える。場の運営のため、制度の枠組みに合わせた語彙を用いて助成金申請をする、社会的に了解されやすいストーリーを提示して支持を集める、といった戦略もその一種だ。

この社会の中で生きる上で「魂を全く売らない」というのは不可能であるため、何らかの形で折り合いをつけなければならない。しかし「部分的に魂を売る」ことには様々な難しさがある。K さんによれば、「部分的に魂を売る」論に対して、「だんだん売ってる部分が増えて、気づいたら疲弊して、売らない部分も残ってない」という批判もあったという（貴戸・山下 2012）。また、「売っている」部分や程度、そして「魂を売っている」こと自体を自覚できていない場合、いつの間にか全部を「売ってしまっている」事態に陥ることもある。そのことについて K さんは次のように述べる。

（軸を）持った上で今の社会とどう折り合いをつけるか、部分的に魂売るのかっていうのと、軸がないままにどう折り合いをつけるのかっていうのは違うんじゃないかと思って。

その軸を作っていく過程は傍目には理解されがたく、長い時間もかかる。しかし、そうした軸や「売らない」領域を通して、立場や分野を超えて人とつながることができると K さんは感じている。

人によって売る量とか程度は違ったりすると思うし、問題意識があって「ここは売れない」とか人によって違うと思うんですけど、そういう部分を持って、そういうところでつながれるみたいなことがあればいいんじゃないかなと…（中略）…難しさとかやっていけなさ

みたいなことひっくるめて、そういう「水脈」みたいなものが流れ続けていればそれでいいのかなと思うところはありますね。

なるにわにゲストとして関わる人や度々交流をする団体、別分野で活動しているもののなるにわを応援している人等、地表からは見えづらくても、ゆるやかなつながりが「水脈」として広がっているのである。

4.5　小括

本章の最後に、なるにわがいかにして生きづらさを名前のないまま、個人化せずに受け止めてきたかをまとめる。

4.2 で述べたように、なるにわ（旧コムニタス・フォロ）は社会との関連において生きづらさを捉え、考えていく場として生まれ、生きづらさの個人化への問題意識は当初から強く存在した。また、人が理性的で自立的であれないような「しんどい」状態にある時、親密圏のみで抱えてしまう傾向があるが、そのような状態を受け止められる場としてあり続けてきたことも、生きづらさの個人化への抵抗の一つと言える（4.4.1）。

また、「なるにわ」の由来（4.3.4）や、あえて属性を問わない当事者研究会を開いていること、「名前のない生きづらさ」という言葉が生まれた場であることから分かるように、生きづらさの名前を問わないことは意識的になされている。その背景には、対象化のために名前をつけるという行為が、その人々の状態を「問題」と定義し、それに対して「治療」「指導」「支援」を施すという思考回路を導きやすいことへの危惧がある（4.3.2）。

さらに、なるにわは、社会的に了解されやすいストーリーを引き受けない、提示しないという方針を採っている。ストーリーからこぼれ落ちるものを捨象することが場の参加者を抑圧しうること（4.3.3）、ストーリーの提示が、集約しづらい生きづらさや一人一人の固有な部分、揺れ、非直線的な時間（4.4.1）を受け止めるという場の位置づけとそぐわないこと等がその理由だ。

このように、なるにわは人々の生きづらさを受け止めてきただけでなく、場自体が苦しみを再生産してしまわないようにも注意を払ってきたのである。

年表

年	なるにわ　　Kさん	社会
1992	学生新聞で東京シューレを取材	バブル崩壊
		地下鉄サリン
1996	東京シューレのスタッフに	
1998	不登校新聞創刊、編集長に	「ひきこもり」
		NPO 法
2000	大阪に移る	
2001	フリースクール・フォロ設立	
		「ニート」
		貴戸・常野の著書
2006	コムニタス・フォロ立ち上げ　　編集長辞任	
		世界金融危機
2008	タベルナ・フォロ（～2009 年）	iPhone・Twitter
2009	『迷子の時代を生き抜くために』	
2011	生きづらさからの当事者研究会（づら研）開始	東日本大震災
2012	現在地に移転	
	大学の非常勤講師を始める	
2014	「なるにわ」に名称変更、なるにわラジオ	
2015	「ひきこもるデー」	
		教育機会確保法
2017	野田さんとの共著『名前のない生きづらさ』	
2018	「お庭番」体制の開始	
		新型コロナ

第五章　R さんの開いている場の事例

最後の事例として、R さんの開いている場を取り上げる。第二章～第四章では一つの団体が開いている場を見てきたが、本章では R さん個人を中心に複数の場を記述していく。複数の場はそれぞれ別枠で開かれ、物理的拠点も 1 ヶ所に定まっているわけではない。また、いずれの場も「生きづらさ」を直接掲げているものではない。しかし、R さん自身の生きづらさと場づくりの実践とが密接に関わっていること、R さんの活動が従来とは別様の生きづらさの捉え方を示唆することから、本研究で取り上げるに至った。

本章では、R さんが場づくりに関心を持つようになった背景、主な活動の経緯、そして「応答」という考え方について記述し、その上で R さんの実践を生きづらさと関連付けて小括する。

5.1　場の概要

本研究で話を伺った R さんは、愛媛県出身で現在京都市に暮らす 40 代男性である。ヒアリングは、2020 年 7 月 27 日には畑での作業をしながら、28 日にはシェアハウスのフリースペースにて行い、10 月 30 日にはオンライン会議ツールを使って実施した。本文中では 7 月 28 日実施分を「R さんヒアリング①」、10 月 30 日実施分を「R さんヒアリング②」と表記する。

R さんは中学校時代のフラッシュバック（5.2 参照）を機に、「いかにして回復は起こるのか」に強い関心を持つようになった。やがて、回復[33]に必要なのは個人への専門的アプローチではなく適切な環境・媒体なのではないかと考え、場づくりを始める。現在は、週 2 回の障害者グループホームでの夜勤で生活費を得ながら、シェア居住をし、畑での自給や話しの場等の活動をしている。

R さんはこれまで様々な場に関わってきたが、現在行っている主なものとして、大きく分けて 2 つの活動がある。

一つ目が「京都のらびと学舎」である。京都のらびと学舎は「野菜の自給を媒介にして、DIY や自律的活動がもたらす学びの可能性を探究している集まり」であり、R さんと Y さんによって始められた。京都市内の畑を借り数人で共有しており、メンバーは各自の都合の良い時に来て作物を育てている。「野菜の自給を媒介にして」とあるように、食料の入手や自給自足が目的なのではなく、「自分が更新される体験を自らに与えるとはどのようなことか」「自分は世界とどのように関わっていけばよいのか」を探究する過程そのものを目的としている。2020 年は「畑のオープン日」を設け、4～11 月の毎週月曜日 11～14 時には、誰でも畑を見学したり作業に参加したり昼食を持参して食べたりできるようにしていた。

---

[33] ただし、R さんは現在は「回復」という語を使うことには慎重になっている。

二つ目は話しの場である。R さんは「私の探究・研究相談室」「DIY 読書会」「リードイン」等、複数の話しの場に参画している。いずれも有志による自主企画であるため、参加費は発生しない。

私の探究・研究相談室は、既存の枠組みや分野、方法にとらわれずに自分にとって核心的な探究をし、それをシェアする場である。R さんと S さんによって月に 1 度開かれている。完成形にして発表する必要はなく、自分の探究の現在地や過程をシェアするだけで良い。1 回 2 時間ほどで、数人が参加している。

DIY 読書会は、不定期で開かれている読書会である。元々は、カサルーデンスというシェアハウスを拠点とした団体の企画だったが、読書会の参加者の一人である R さんがそれを自分たちでも行うようになった。

リードインは、興味をひかれた他人の言葉や文章を一つ持ち寄り、そこに自分の感じたことや考えを添えて紹介し合う場である。哲学者の鶴見俊輔を中心に行われていた集まりを原型とするが、鶴見の「リード・イン」に参加したことのあるメンバーがいない中、手探りをしながら自分たちに合う形へ微調整してきた。

その他にも、香害[34]やハラスメント等の被害・被抑圧当事者とともに随時「ワーキンググループ」を立ち上げ、社会問題化していくための実践も行っている。

5.2　場づくりに至るまで

本節ではまず R さんが場を開くようになった経緯を見ていく。

R さんは中学生の頃に受けたいじめをきっかけに、フラッシュバックのようなものに打ちのめされるようになった。特に執拗にいじめてきたある同級生を R さんは憎み軽蔑していたが、ある時自分も同じ性質を持っているのではと感じ、そうした憎しみや軽蔑が自分に跳ね返ってくるようになったという。

> *いじめられても自分は彼らと一緒じゃないと思って、自分をたのみにしていたが、そのたのみにしていた自分が壊れた。*（turumura 2018）

それ以降、「フラッシュバックがどうやったら緩和するのか、そしてこの自分がどう回復し、生きていけばいいのか」（同上）が切実な関心となった。ちなみに R さんは中学校へは途中から通わなくなったが、「不登校」としてアイデンティファイしたり不登校のコミュニティに属したりといったことはないという。

そのような状態にあった R さんを、両親は、事前の了解なく精神科に連れて行ったり、「可哀想」「弱い」といったイメージで解釈したりした（「環境と対話」研究会編 2020）。あ

---

[34] 合成洗剤や柔軟剤、化粧品類などに含まれる合成香料（化学物質）のにおいによって、不快感や健康被害が生じること（尾張旭市 2020）。

まりに自分の話が通じず、このままでは自分は駄目になると思った R さんは、北海道の牧場の実習生に応募し、そこに住み込むこととなった。

その後、全日制高校や通信制高校、東京での浪人生活を経て京都の大学へ進学した。この頃になるとフラッシュバックはある程度緩和されていたが、その一方で、対人関係のつらさに苛まれ、また自分の拠り所になるような得意なことも見出せなかった。むしろ、フラッシュバックの緩和という目指す先がなくなったことで、どのように生きていけば良いか分からなくなっていた（同上）。

大学では心や自分、回復についての知を求めて、臨床心理学科へ進学したが、やがてカウンセリングや臨床心理学そのものに疑問を抱くようになった。あまりにも自分の問題意識で語ることのできる場がなく、「酸素がない」と感じており（R さんヒアリング②）、むしろ同時期に所属していた演劇部での経験や関係性の方が自分の回復に寄与しているように思えたという。

さらに、大学に講師としてやって来た映画監督の坂上香氏から修復的司法[35]や映画『ライファーズ』のことを聞いたことで、R さんは臨床心理学よりも坂上氏の取り組みの方に手がかりがあると感じる。その後は「治療」ではない枠組みでの回復を探究するようになった。（turumura 2017）。

その一つが 40 日間をかけて行った四国八十八ヶ所巡りである。R さんはこのことに大きな影響を受け、大学院に進学し人類学分野で四国八十八ヶ所巡りの研究を行った。そしてその研究を通して、「人間は適切な環境・媒体があれば、自律的に必要な変化に向かう」「変化を導くのは心理の知識であるよりも、自分のなかで動いているものを感覚し応答することであり、技法であるよりも場なのだ」（「環境と対話」研究会編 2020）と考えるようになり、場づくりに関心を持った。

5.3　京都のらびと学舎

前節では R さんが場づくりに関心を持つようになった経緯を述べたが、初めから自らの回復のための場づくりがうまくいったわけではなかった。本節では、R さんの模索の一端を伺える、京都のらびと学舎の経緯や活動のあり方を見ていきたい。

5.3.1　設立背景

R さんらが自給に関心を持ち、京都のらびと学舎を始めることになった背景には、自給の実践家である糸川勉氏との出会いがある。

R さんが大学院で人類学を専攻していた頃、研究の傍ら「人と人を媒介」するような企

---

[35] 「被害者と加害者、犯罪の影響を受けた周囲の人々など、事件の当事者が主体的に集まり話し合うことで、事件によって引き起こされた害悪の解決をともに模索する取り組み」（東京都人権啓発センター 2015）。

画・場づくりをしていた。それらを通して面白い出会い等はあったが、自分が更新される感覚が得られなくなっていき、徐々にイベント疲れしていった。

そのような時に、市内で自分の田畑で採れたものを定食にし出している人がいると聞き、R さんは糸川勉氏の運営する「畑カフェ おいしい」を訪れた。元々畑に興味があったわけではなかったが、糸川氏の自給の思想と「毎月サラリーマンとして給料をもらうのと、一年分の米が獲れて一年生きていけるという感覚はまるで違う」という言葉に出会い、「これだ」と思ったという。その糸川氏の自給農法[36]について、R さんは自身のブログで次のように記している。

> *糸川さんの自給のために考案された農法（自給農法）では、農業として畑をやると出てくる高いハードルがどんどんクリアされる。薬を使わず、鍬と鎌などの最小限の道具で畑をやる。糸川さんの自給は「小さいものを間引く農業とは逆で、作物は大きく育っているものを先に間引きして食べる。すると小さいものが育って、全体として食べる総量が増える。」というように、お金を稼ぐための農「業」とは真逆の発想で、自分自身が生きることが中心だった。…（中略）…*
> *自給農法を学ぶ前は、畑は大変で水やりも毎日ぐらい必要だというような勝手に想定されている「やらなければいけないこと」に圧倒されていた。ところが自給農法を学んでいくと、自分の求めや必要性に対して、それが満たされれば十分なのであり、むしろ自分に合わせて、このようにもできるし、あのようにもできるということが体験を通してわかっていった。*（turumura 2018）

その後 R さんは、2007 年に開かれた京都精華大学の公開連続講座「現代生活学講座『21 世紀的！Art of living―ロハスを超えて』」に参加した。そこで、R さんの「畑をしたい」という話を聞いた他の受講者が、畑をしている親戚を R さんに紹介した。その親戚がさらに、自身に畑を貸している地主の一人を紹介し、R さんは畑を借りられることとなった。

また、R さんは 2000 年代末、毎週月曜日営業のコミュニティカフェ「喫茶はなれ」に何度か通っていた。当時、喫茶はなれは文化的拠点となっており、食やアート、社会に関心のある人々が集まっていた。Y さんとも、喫茶はなれの運営メンバーに紹介されて知り合ったという。Y さんも当初は農に関心があるわけではなかったが、自分が世界とどのように関わっていくかという観点から自給に興味を持ち、2 人で畑での活動を始めることとなった。

5.3.2　経緯

このような次第で畑での活動は始まったが、年月とともにその形態は変わってきた。

---

[36] 糸川氏にとって自給とは、生活手段と社会運動が一体となったものだった（「環境と対話」研究会編 2020）

最初期はRさんとYさんの2人で畑での自給を行っていたが、なかなか手応えを感じられなかったという。そこで2年目ほどから、月に1度糸川勉氏を畑に招いてレクチャーをしてもらうことにした。このレクチャーは、Social Kitchenの公開企画「レクチャー＆ワークショップ：台所大学『畑を知る、畑を作る、畑を生きる』(通称・畑レクチャー)」として行われ、参加費500～1000円で誰でも参加できるようになっていた。Social Kitchenとは、NPO 法人化した喫茶はなれの運営団体が、2010 年に新たにオープンさせた文化的拠点である。この施設は「21 世紀型公民館」を掲げており、カフェや本屋、スペース、シェアオフィスから構成される（Social Kitchen 2021)。Yさんも Social Kitchenの運営に参画していたため、Social Kitchenでの開催となったのだった。

この企画は2010年から約2年続き、多い時には10人ほどの参加者がいたという。しかし、「自分たちにフィードバックがない」ことや、参加者も、翌月から参加しなければ自身の変化や作物の成長を経験できないことから、単発参加という形を見直すことにした。

2013年、RさんとYさんは畑での活動に「京都のらびと学舎」と名前をつけ、リニューアルを行った。より動機の強い人に対して企画をしていこうと考え、通年で畑を利用する人を募集した。参加者は年4万円で2m×5mほどの畝を2つ使うことができ、月に2度糸川氏による実習を受けられる。そして実習以外の時間は各自で畑へ赴き、自分の畝で作業をする形だ。

すると、参加者の意識の変化が感じられ、Rさん・Yさんにとっても「面白くなってきた」という。この頃になると、人づてやリピーターで参加者が集まるようにもなっており、中には3年ほど畑に通い続けた人もいた。また、Rさん・Yさんと参加者との間に関係性が生まれ、そこから派生してイベントを企画したり他の場につないでもらったりしたこともあった。ある程度うまくいったこの形態は3～4年続いた。

一方で、課題も浮きぼりになった。

こっちが枠組みを提供する側で（来る人が）受ける側っていう感じで最初からやっちゃうと、受ける側とやる側が固定化しちゃうっていうか…（中略）…自分がもし受ける側になっても多分そうなっちゃうと思うんだけど、ちょっと関係の固定化みたいなのはどうなんだと思って（Rさんヒアリング①）

さらに、そのような折、講師の糸川氏が脳梗塞で倒れ、畑に出られなくなってしまった。糸川氏のあり方を様々な人に知ってもらいたいということも活動のモチベーションの一つだったため、その後の方向性に悩み、3～4年模索の日々が続いたという。

ある年は、週に1度の実習を通して大体のやり方を覚えてもらい、やがて畑のシェアメンバーに加わってもらう形を採った。3人ほどが集まり作業自体は捗ったが、関係の固定化の傾向は依然として見られた。

自分で学ぶっていうことじゃなくって、「教えてもらえばいいや」になっちゃうんですね。だからいつまで経っても「ジャガイモの植え方どうするん」みたいな話を、次の年もその次の年もする。ジャガイモなんて、ジャガイモの深さより二つぐらい掘ってそこに土かければそれでいいわけですよ。…（中略）…これじゃあかんわ、これ違うよなみたいな感じになってて。（R さんヒアリング①）

そうしたことを経て、2020 年は 4〜11 月の毎週月曜日を「畑のオープン日」と設定し、11〜14 時の間は誰でも畑の様子を見たり作業に参加したりできるようにした。2020 年の京都のらびと学舎の案内文には、次のような箇所がある。

これは特に何かを教えたり伝えたりという目的ではなく、時間内出入り自由で、散歩の途中についでに見るだけで畑にきたり、畑にいる人に会いにきたり、お昼どきに昼ご飯を持ってきて畑で食べていったりなど、公園的利用のようなイメージをしてもらって構いません。ただサービスする側とサービスされる側の関係ということではないので、天気の悪くなりそうな日に誰もいなかったりとか、たまたま来た時にもう一つの畑の方に行く必要ができてそちらに行っていたりするかもしれませんので、その際はご容赦ください。お互いに無理なくシェアできるものをシェアする場になればいいなと思っております。（京都のらびと学舎の Facebook より）

この方針転換の背景には、京都大学吉田寮での炊き出し活動の影響もあるという。

R さんは 2019 年から、知人の主催する炊き出し活動「京大吉田寮水曜ゼロ円メシ」を手伝うようになった。関わるうちに R さんは炊き出しの「公的な側面」を見出し、「外に出て様々な人に出会っていくっていうあり方があるな」と感じ始める。そこから京都のらびと学舎も、自給のみをテーマにしていると、外からは私的に閉じているように見えて人が来づらいのではないかと考えた。そうして様々な人や世界との「接点」を作るべく「畑のオープン日」が編み出された。

何かやりたい人は初めからガンガンやるんだと思って、だからその接点だけ作ればいいと考えたんですね。畑のオープン日っていうのはその接点で、ここでなんかやってくださいとかなんか学んで下さいとかじゃなくって、誰でも来れるっていう接点だけは確保しとくっていう。…（中略）…
だから最初から「この活動します」っていうことで募集する必要はなくて、それぞれやりたいことがあるしやれることもあるんだから、その接点でやれることあったらやろうっていうか、むしろそっちの方が広がりが（ある）。「京都のらびと学舎でやります、その枠組みに入ってください」って言うんじゃなくて、相手を最初から独立した存在として考えて、お互いのこと（＝接点）で「だったらこれやろか」っていう風になったらそれをやる

（R さんヒアリング①）

「接点」という考え方をもとに、水曜ゼロ円メシとの連携も模索し始めた。京都のらびと学舎が、畑に来るメンバーがやや固定化している状態にある頃、水曜ゼロ円メシは、活動のコアメンバーが増えず 2～3 人でなんとか回しているという悩みを抱えていた。そこで「どちらかに関心のある人がどちらにも来れる感じにすると、新しい人も来やすいんじゃないか」と考え、畑の野菜を使った炊き出しを年に数回行うことを現在検討しているという。

このような新しいあり方を、R さんは「日常を広げる」とも表現している。畑のオープン日は、あくまで畑という R さんらの日常に世界との接点を設けたものであり、「お客さんを待ってるわけじゃない」のである。このことは京都のらびと学舎の SNS の運用方針にもよく表れており、初めは、雨天の日には畑に R さん・Y さんが来るかどうかを SNS で知らせなければならないのでは、と Y さんも心配していたが、「まあ日常でええじゃないですか」「雨で自分らが行かないのもそれが日常なんだから」と、逐一投稿しないことにした。

こうした形を採ってから、活動に関心を示していた近隣の人が定期的に畑に来るようになったり、以前 R さんとワークショップを共同開催した飲食店の人が訪問したり、新型コロナの影響で炊き出しができなくなった水曜ゼロ円メシのメンバーも来るようになったりと、「広がり」を感じられるようになったという。

図 9　畑の様子（2020/7/27 筆者撮影）

筆者も 2020 年 7 月に京都のらびと学舎の畑を訪れ、農作業に参加した。

畑にいる間に R さん含め 3 人の方に会ったが、それぞれがそれぞれのタイミングで訪れ、それぞれに作業を行っていた。R さんは、週 2～3 回のペースで自宅から自転車で畑に通っているという。

R さんは長靴に作業着を着ており、後から来られた方も長袖と帽子を着用し、首まわりも

覆っていた。畑の一辺は屋根付きのエリアとなっており、そこにベンチや用具、機材等があった。収穫済みの野菜もここに吊り下げられていたり置かれていたりした。

この日は不安定な天候だったが、雨の合間に作業することができた。筆者は R さんとともにネギの生えている一角の草抜きをすることとなった。この一角にはミニトマトも生えていたが、R さんによればミニトマトの種は消化されづらく、ミニトマトを食べた鳥等がフンをすることによって植えていなくても勝手に生えるのだという。これものちに収穫できるため、取り除かなかった。

ネギは雑草や他の野菜に交じって不規則に生えていた。R さんから軍手と鎌を借りて、ネギを見分けながら雑草だけを抜いていく。一通り草抜きをした後、今度はネギを一旦干すために根から抜いていった。「もう少しネギが太くなってから干すという話もあるがやってみようとなった」と R さんは語っていた。

筆者が畑作業をしていたのはほんの一時間程度であったが、ネギの区画一つをとっても、「野菜は別の種類と交ざらないように植えるもの」「雑草はいつも抜かなければならない」「全てのネギを同じ方法で育てなければならない」といった固定観念が取り払われ、「この日見た方法のほうが理に適っている」と認識が更新された。また、正解を想定して行うのではなく自分たちで試しながらやっていけば良い、むしろその過程こそが肝要であるということを、実感を通して知る機会となった。

5.4　話しの場

さて、京都のらびと学舎と並んで R さんが大事にしているのが話しの場である。本節では、R さんが現在関わっている主な話しの場―「私の探究・研究相談室」「DIY 読書会」「リードイン」を中心に、場づくりの経緯と試行錯誤の過程を見ていく。

5.4.1　背景

R さんが仲間とともに話しの場を開くようになったことには様々な背景があるが、一つには、R さん自身が長い間、話せる場所が常時不足しているという感覚や、「なかなかそうほっといてどっかに行けば話せるみたいなことではない」（R さんヒアリング①）という感覚を抱いてきたことがある。

また、大学や大学院での経験も関わっている。5.2 で述べたように、R さんは臨床心理学科に所属していたが、自分の切実な関心を語ることのできる場がなく「酸素がない」ような気持ちでいた。卒論ゼミには恵まれ、大学院進学後も自分の関心に近い形で四国八十八ヶ所巡りを研究することができたが、そこでも分野とのズレは感じていたという。

例えば心理学だったら、人間の中には自律的な自己治癒力があって、カウンセリングというのはそれを活性化するもの、あくまでその本人の自己治癒力が治すんだっていう考え方ですね。それを文化人類学の方で言うと、「それは心理学では前提かもしれないけどこ

っちでは違うから」みたいなこと言われて…（中略）…何て言うかな、「統合的な知はどこにあるの」みたいな。（R さんヒアリング①）

また、人類学の修士課程の後に入学した教育系大学院でも、アカデミアに違和感を抱く出来事があった。R さんは人類学について学ぶところはいくらでもあるだろうと思いつつも、「四国遍路に関わるところで自分が変わるっていうのはこんなもんだろう」という感覚があり、「次のこと」をしたいと考えていた。ところが教育系大学院で、四国八十八ヶ所巡りではないテーマを研究したいと指導教員に言ったところ、受け入れてもらえなかった。

これらのことを経て R さんは、自らが生きる上での関心を追究するにあたっては、分野や学術研究の手続き、専門性の追求が不自由をもたらし、しばしば人を学びから疎外してしまうと思うようになった。

学問的正確さとかそういうことじゃなくて、ただ探究したいから探究する。その人の時間を動かすことだと思うんですね。…（中略）…それが学びの体験だと思うし、応答性を回復していく体験でもある。（R さんヒアリング②）

5.4.2　私の探究・研究相談室、DIY 読書会、リードイン

こうした経験と、当事者研究や民間学・在野学への関心を背景に生まれたのが、「ジャンル難民ミーティング」（のちの私の探究・研究相談室）である。ジャンル難民とは、自分の関心や探究が既存のジャンルに回収できない人々のことであり、『コミュニティ難民のススメ』（アサダ 2014）から着想を得た造語だ。そうした人々が分野や手順にとらわれず自らの探究をし、その過程を他者にシェアするための場として、2018 年から実験的に始められた。

ジャンル難民ミーティングは、発足時から度々本町エスコーラで開かれていた。本町エスコーラとは、京都市東山区にある長屋を改修して作られた文化的拠点であり、コミュニティースペース・住居・アトリエ等から構成されている。現在私の探究・研究相談室を共同主催している S さんも、本町エスコーラに元々関わっていてこの活動に興味を持った。

その後、ジャンル難民ミーティングを展開していくにあたり、「ジャンル難民」という言葉が誤解されうること、比喩でない難民の問題に配慮する必要があると考えたことから、「私の探究・研究相談室」へと名前を変えた。

筆者も 2020 年 8 月、オンライン開催された際、私の探究・研究相談室に参加した。参加者は R さん・S さんを含めて 5 人で、冒頭にはそれぞれ今日の気分や体調を一言ずつ述べていった。会では必ずしも原稿を用意して発表する必要はなく、この日も R さん以外の参加者は R さんの発表への質疑やそこから想起したエピソード、最近の自身の関心等を適宜語っていた。最後に再び参加者が一言ずつ話す時間があり、その後お開きとなった。

私の探究・研究相談室の現状について、R さんは「『探究・研究』って言うとちょっと人には重いところがあるんですよ、（参加者が）『研究しなきゃいけない』『自分のは探究にな

ってないなあ』ってなっちゃうんですよね。」（R さんヒアリング②）と述べており、今後も試行錯誤していくという。

DIY 読書会は、元々はカサルーデンスという団体の一企画として行われていた。カサルーデンスは、文化住宅をシェアハウスに改修し活用するため、2016 年、建築やアートに関わる人々によって結成された。カサルーデンスの「南区 DIY 研究室」という枠組みの一環として「南区 DIY 読書会」があり、そこでは各自が読みたい本を読んで来て自分のペースで発表し、それをもとに皆で語り合っている。本を一冊読み切らなくても良く、本でなく自分の活動の発表をしても良いという。R さんも一参加者としてその読書会に加わっているが、関わるうちに自分たちでも会を開くようになった。

R さんらが行っている DIY 読書会はより敷居を下げる形にアレンジされており、また「DIY 読書会」を、固有名詞からあり方を表す言葉へと再定義している。そして 2019 年には、DIY 読書会のすすめおよび Q&A をウェブ上で公開している（turumura 2019）[37]。この DIY 読書会というあり方について、R さんは次のように語る。

> *DIY っていうのはモノ作りのことじゃなくて、やり方とかも DIY（の対象）なんだって。…（中略）…本をいかに正確に理解できたかじゃなくて、その本になんで興味持ったのかとか、その本を読んでどんなことを思ったのかとか、そういうプロセスの方を重要視してるんですね。だから読書会を、完成したものを出す場所じゃなくてその刺激を受けてる過程を促進させる場所だってそういう位置づけで。*（R さんヒアリング①）

このように DIY 読書会の趣旨は、本を媒介にして、自らが更新されるような体験を自らに与えることなのである。

リードインは、DIY 読書会よりもさらに敷居の低い場として 2019 年から実験的に始められた。リードインの目的と位置づけについて、R さんはブログで次のように記している。

> *現代において、人は自分が感じていることを乖離させたほうが生きやすい。しかし、その乖離によって、その人は自分を現状から回復させていくことも、自分の力を増幅させていくこともできなくなっている。*
> *現代の人は自分の考えや感じ方を持った自立した個人ではなく、自分の考え以前、自分の感じ方以前の状態にいると思う。…（中略）…リードインは、参加者が他人と自分の言葉（文章）を持ってきて、それを紹介するという非常にシンプルなもの。しかし、まず他人の言葉という導きがあり、そこに自分の感じていることを添えるという行為のなかで、自*

---

[37] 「DIY 読書会をやってみよう」
https://docs.google.com/document/d/1GJDk5Dx2piRlwB3C9QnrH0CyD6le_LTJQK0TehMsufY/edit

分の思考と感受性がリハビリされていくと思う。意見以前、感じていること以前の状態では、まずはそこからはじめていく必要があるかと思う。（turumura 2019）

最近は、R さんの仲間の一人が主となってクローズドな形で開いており、R さんは参加者的な立場のことが多いという。

以上、3 つの話しの場について見てきた。それぞれの場で参加者はさほど重複していないが、一部メンバーは他の場にも時折顔を出すそうだ。

とはいえ、あくまで現時点ではこの 3 種類ということであり、より適したあり方を今後も探していくという。

5.5 「応答」という考え方

R さんは「応答」という言葉をしばしば口にする（5.2 および 5.4.1）。R さんがこの言葉を使うようになったのはここ数年のことであるが、「応答」は R さんにとって「向かうべき方向みたいなのを導いてくれる」「正確な言葉」（R さんヒアリング①）なのだという。

「応答」とは、辞書的に言えば「問いかけや呼びかけに答えること」であり、「応答」の対象は他者の声や言葉となるが、R さんの場合は、人だけでなく世界や環境、自分の中の感覚もその対象となる。畑での自給を例にとれば、畑に働きかけると植物の成長や土の状態といった形で自然から「応答」があり、それを受けてまた畑に「応答」していくという循環がある。また、ある手法や畑との関わり方を試すと自分の中で手応えや変化があり、それらを受けて次なる方法・関わり方を試すわけだが、それも自分の中の感覚に対して「応答」しているということなのである。

R さんによれば、こうした「応答」はサービスを提供したり利用したりするだけでは起こらないという。

そこに応答関係を回復していくことが DIY 的なことなんかなって思います。まあ、全てのことにね、何でも（DIY 的に）やらなきゃいけないわけじゃなくて、自分が応答性を回復するところがあると思うんです[38]。それぞれにそれをやっていくっていうのがいいんじゃないかなって思います。（R さんヒアリング②）

京都のらびと学舎の活動がサービスとなってしまわないように試行錯誤がなされてきた（5.3.2）のも、こうした理由からなのである。

R さんの一連の活動は、世界との直接的な関係と自らの「応答」性を取り戻していこうとするものであり、自給の考え方や R さんの言う DIY（5.1 および 5.4.2）は、その趣旨を具体的実践の次元に落とし込んだものと言えよう。

---

[38] R さんにとってはそれが自給であり場づくりだった、ということである。

	流通している意味	Rさんの用法
応答	問いかけや呼びかけに答える行為	行為というより現象やあり方であり、 応答の対象や応答方法も広範
回復	悪い状態から元通りになること・ 治療により成し遂げられるもの	応答関係を取り戻すこと・ 自分のリアリティが更新され続けること
自給	必要な物資を自力で獲得して賄うこと	自らが更新されるような体験を自らに与えること
DIY	素人が自分で物を作り、修繕すること	物だけでなく環境や方法、自分と世界との関係性もDIYの対象

表 1　R さんの用いる語彙（筆者作成）

5.6　小括

R さんは、第二章～第四章の事例とは異なり、生きづらさを抱える人の参加する場を開いているというより、R さん自身が生きづらさと向き合いそこから抜け出していくために、自ら場を創り参加してきたと言える。

R さんは、当初はフラッシュバックに苛まれていたが、それが緩和していった後も、名前のない生きづらさを抱えていた（5.2）。独自に回復を探究する中で、必要なのは個人の心理への専門的なアプローチではなく、適切な場や媒体の設定だと思い至る。R さんにとっての生きづらい状態とは、自らのリアリティが更新されていかないこと、「時間が動いていかない」（5.4.1）ことであり、そうした状況を脱するための媒体が、自給や場づくりなのである。

自給や話しの場では、R さんらが自分たちに合うように枠組みや方法を調整していく様子が見られた。このことから、既存の枠組みやイメージ―例えば農「業」や学術研究の型―から解放されていくことがリアリティの更新の一つとうかがえる。R さんは、自らの実感や環境からのフィードバックを手がかりに様々な試行錯誤をしてきたが、そのことを通して自分と世界との間の「応答関係」を取り戻してきたのであった。

年表

年	R さん	社会
1975	愛媛県にて誕生	
1990 頃	いじめ被害をきっかけにフラッシュバックが始まる	バブル景気
		バブル崩壊
	北海道の牧場で 1 年間住み込み	
	帰郷し、アルバイトをしながら高校進学を目指す	阪神淡路大震災
	全日制高校→通信制高校→大検取得	Windows 95
	大学では臨床心理学を専攻。演劇部	
2003 頃	坂上香さんが講師として大学に来る	
	四国八十八か所巡りを行う	
	修士課程に進学（人類学、四国八十八か所巡りの研究）	
	「人と人を媒介する」場づくりを実施	
	糸川さんと自給農法との出会い	
2007	2 つ目の大学院休学時。宇治で田んぼの活動	
	京都精華大学の公開講座への参加	世界金融危機
		iPhone・Twitter
2010	Social Kitchen での畑レクチャー企画開始	
		東日本大震災
2013	京都のらびと学舎としてリニューアル	
2018	ジャンル難民学会（→私の探究・研究相談室）	
2019	吉田寮での炊き出し活動への参加	
2020	畑のオープン日を始める	新型コロナ

第六章　考察

第二章～第五章では、それぞれの場や人の実践を記述し、①生きづらさを個人化せず、②生きづらさに名前を求めないあり方、という観点から事例を小括した。本章では、各事例の実践を通して新たに見出された視座から考察していく。

6.1　過程を奪われる社会

6.1.1　〈応答〉と過程

まず、生きづらさを抱える人が場で経験することに焦点を当てて、各事例を再度見ていきたい。

シューレ大学では、学生らが自らの学びや生き方を試行錯誤しながら創っており、また、修了報告会やアルバイトの会等、シューレ大学の形そのものも、話し合いを重ねながら創ってきた。修了報告会では修了の意思決定に他者が関わるプロセスが存在しており、パイロットプロジェクトではクライアントと直接やり取りし全工程に関わることで、仕事をともにつくっている感覚を得る様子がうかがえた。

YC スタジオは、「居場所」であると同時に、やってみたいことを行える場、「手ごたえのある」生き方を創っていく場として開かれてきた。ソーシャルファームの試みにおいては、当事者が仕事づくりの過程に参画したり、自分のできること・普段していることが仕事になるのかを模索したりできるようにしている。

なるにわは、当初テーマ型の企画を主な活動としていたが、参加者と K さんで試行錯誤するうちに、サロンのような非目的的な日常の場がベースになっていった。づら研も、参加者で手探りしていく中で現在の形に落ち着いていった。なるにわは、「居場所」として生きづらさを感じている人を受け止めてきたが、参加者は受け止められるだけでなく、コムニタス・フォロからなるにわへの立ち上げ直しに参画したり、様々な企画を立ち上げたり解消したりもしてきた。

R さんは、生きづらさを抱える人に場を開くというより、R さん自身が生きづらさに向き合いそこから抜け出していくために、自ら場を創って参加してきた。畑での活動では、糸川氏の自給農法を参考にしつつ、野菜を育てる方法や畑との関わり方を、自分の実感を手がかりに試してきた。自主研究・探究や話しの場も同様に、どのようにすれば自分がより更新されるのかという観点から行われ、形や方法も調整され続けている。

いずれの事例においても見られるのは、場の参加者が自ら試行錯誤している様子であり、その過程を通して場が醸成され、参加者自身にも変化が起こる様子である。参加者は、自ら考え試す過程があることで場の主体であれると考えられ、過程を繰り返す中で、結果として自らの生活や人生の主体にもなっていくことが示唆される。

こうした、場と参加者との間に起きている相互作用・相互変容を、R さんの言葉を借りて〈応答〉と呼びたい。R さんは自分の中の感覚をも「応答」の対象としていたが（5.5)、本

研究においては、場や社会と人との間に起こる〈応答〉を中心に論じる。また、この〈応答〉は、誰かに強制されてなされる応答や、社会から期待する形や方法で行われる応答とは区別される。

6.1.2　過程がないことの生きづらさ

次に、それぞれの場の参加者がそこへやって来る前にどのような経験をしてきたかを振り返りたい。

シューレ大学は、フリースクール OBOG らが中心となって立ち上げられた場だが、徐々に学生のバックグラウンドは多様化していった。とはいえ学生の多くは、「小―中―高―大―就職」というレールに合わなかったり、一般の学校や大学、労働の場等で「自分が自分であれない」「思うように生きられない」と感じたりといった経験をしていた。

YC スタジオは、子どもの居場所フリーダス OBOG らを中心に設立され、徐々にその利用者の層が広がっていった。既存の労働の場や就労支援制度が合わず深く傷ついた人や、精神障害や発達障害の当事者で薬を多く処方されている人等も来ている。

なるにわは、不登校のその後や若者の困難について考えたいという思いから生まれたが、生きづらさの名前の有無や年齢の差を超えた様々な人がやって来ている。第一章で見たように参加者の中には「名前のない生きづらさ」が見られ、また K さんからは、社会に了解されやすいストーリーからこぼれ落ちる人が来ているという所感も聞かれた（4.3.3）。

R さんは、心理学やカウンセリング等の専門的なアプローチに違和感や停滞感を抱き、坂上香氏の映画や四国八十八ヶ所巡り等を経て、場づくりに関心を持つようになった（5.2）。また、大学・大学院で学問分野や方法に不自由さを感じた R さんは、学術的な枠組みに則るのではなく、自分がより更新される方法を自ら探り、在野で探究・研究を行ってきた（5.4.1）。

このように、事例の場に来ている参加者には、既存の枠組み―例えば労働や医療・福祉、学問等の制度やサービス、体系―が合わずに苦しんだり、それらでは生きづらさが軽減されなかったりした経験が多く見られる。

枠組みや制度は、ある程度普遍化した対処を行うために整備されるものであり、元来一人一人の固有性に対応していくことが難しい。そこで、様々な人のニーズを満たし課題を解決するために、既存のものの隙間を埋めるようにして制度やサービスが多様化していった。それに伴い、個人は自らのニーズを満たし困難を解消するために、多様な選択肢から自分に合うものを「選ぶ」主体となってきた。

しかし、そのような選択肢が多様化した社会においても、事例の参加者のように、生きづらさを覚え苦しむ人々は現れ続けている。それは、既存の選択肢が合わなかったり、選択肢が存在しても実質的に選べなかったり[39]といった原因も無論あるが、シューレ大学や R さん

[39]「個人が諸課題に対処するうえで必要なさまざまな資源が不平等に配分されている事実

の事例からは、それだけではないことがうかがえる。

シューレ大学の学生らは、アメリカの大学のように多くの講座から選択できる自由や、インターネットショッピングサイト Amazon で無数の商品から欲しいものを購入できる自由（2.3.2）ではなく、自分から始められる自由、自らの学びや人生を創っていく主体であれる自由を求めてきた。また R さんも、自らの生きづらさに向き合いそこから解放されていくにあたり、外部の枠組みに入っていくのではなく（5.4.1）、自給や場づくり等、自ら試行錯誤する過程を重んじてきた。これらのことが示すのは、自ら創っていく過程がないこと、自らの生き方や環境との関わり方を「創る」主体であれないことの生きづらさである。

どれほど多様な選択肢が用意されたとしても、外部により設けられ、かつ〈応答〉のない枠組みに乗る形では、利用者は「選ぶ」主体にはなれても「創る」主体にはなることができない[40]。つまり、自ら考え、時に折り合いながら創っていく過程を経験することができない。こうした、過程がないことの生きづらさには、選択肢を増やすという形では対応できないのである。

6.1.3　過程を奪う名前

前節では、選択肢の多様化では対応できない、過程がないことの生きづらさの存在を示した。本節では、第一章で論じた名づけについて、過程という視点から議論していきたい。

第一章で述べたように、現在の社会に不適応を起こした人々は、専門家らによって精神障害や発達障害、パーソナリティ障害、愛着障害、ひきこもり、ニート等と名づけられてきた。人々の属性名の中には当事者が自ら名乗りアイデンティファイしているものもあるが、ここで挙げている名前は、対象化するために外部から付与されたものである。

専門家らはそれらの人々の状態を「問題」と定義し、「問題」解決のためにその人々に対して「治療」「指導」「支援」を施していった。また、専門性により権威付けされた言説により、「生きづらさを抱える人は専門的な『治療』『指導』『支援』の対象である」との認識が世に流通し、当事者自身もしばしばそれを内面化していく。この時、生きづらさを抱える人々は、「患者」「被支援者」―「まな板の鯉」（E さん 3.4.1）―の立場に置かれ、自らの生きづらさをどう問題定義し、いかにアプローチするかを試行錯誤していく過程を奪われている。

このように、生きづらさを抱える人々をカテゴライズし名前をつけるという行為は、当事者を客体とする非対称な関係を導きやすい。K さんの「どうしても名づけって、そもそも力

に目を向ければ、決定の自由裁量という名のもと、人びとに不適応や過剰適応を強いる『生きづらい』社会とも映る」（有末・大山 2015）。

[40] 「人々の要望を受けて枠組みの側が新たな選択肢を提供する」といったこともあるが、その場合でも利用者は「創る」主体ではなく、また、人々と枠組みがともに更新されるような〈応答〉もそこにはない。

関係とか『それをなんとかしよう』っていうまなざしとかが名前そのものに入っちゃってる」という語り（4.3.2）も、そうした問題を指摘したものだと言えよう。

それに対し、本研究の事例では、名前をつけない／問わないこと、支援者―被支援者の関係の固定化を防ぐことにより、生きづらさを抱える人々が客体化されないようにしていた。それゆえに場の参加者は、6.1.1 で述べたような、自ら試行錯誤する過程を持つことができていたのである。

名づけについて、第一章では、生きづらさに名前がないことによる困難性と、名づけに伴う 2 つの問題―必ず漏れ落ちが発生すること、マイノリティの括り出しにとどまりうること―を論じた。しかし、本研究の事例から見えてくるのは、名づけに基づく対応が生きづらさを抱える人々を客体化し、生き方や環境との関わり方を自ら試行錯誤していく過程を奪いうるという、もう一つの問題の存在なのだ。

6.1.4　〈応答〉のある社会

ここまで、事例における場と参加者との〈応答〉および参加者の経験する過程（6.1.1）、過程のないことの生きづらさ（6.1.2）、名づけが過程を奪いうること（6.1.3）について述べてきた。本節では、最後に、社会のあり方の問題と今後模索されるべき社会の方向性について論じていきたい。

繰り返しになるが、事例の場では、参加者が周囲環境と〈応答〉し合いながら、自ら試行錯誤する過程を取り戻していく様子が見られた。そして、場の主体にとどまらず、自らの生活や人生、ひいては社会についても創り、折り合う主体になっていくことが示唆された。ここでの主体とは、第一章で述べたような「強い主体」では必ずしもなく、多様な選択肢から「選ぶ」主体や、ましてや労働市場で求められる範囲・方向性の限定された「主体性」のことでもない。いわば〈応答〉的な主体である。

自らの生活や人生、社会の主体となっていくことは、「足場」（4.3.4）や「軸」（4.4.2）、「生きることの基盤」（2.5.2）ができていくこととも言い換えられるが、その模索の日々はしばしば長い時間や揺れを伴う。現在の社会ではそのような期間が理解されづらく（2.5.2 や 4.4.2）、人々は何らかの方向―例えば就労―に追い立てられる。また、追い立てられずとも、何らかの状態・主体像に到達するまでの準備期間のように解釈される。「若者支援」の文脈等で採用されるビフォー・アフター的なストーリーも、同じ線上にあるだろう。そうしたストーリーを前提にした支援が無効なわけではないが、そこに枠組みや社会の側が更新される契機がなければ〈応答〉的なあり方とは言い難い。何より、過程は、重ねることで何らかの状態に到達できる“から”価値があるのではなく、それ自体に意味があるものだ。社会学者の小倉康嗣の言葉を借りれば、「模索のプロセスそのものに〈生の意味〉を見出し、プロセス自体を着地点としていくような実存の様式」（小倉 2014: 199）と言えよう。模索の日々には、規定の目標も終わりもないのである。

また、6.1.2 では、枠組みや制度、サービスが人々の様々な困難性・ニーズを解消するた

めに多様化し、個人はそうした多様な選択肢から自らに合うものを「選ぶ」主体となってきたことを述べた。6.1.3 で言及したような、生きづらさを抱える人々に名前をつけ医療・福祉サービスを提供するというのも、選択肢の増加の一形態と言える。

こうした選択肢の多様化は一見、社会の自由度を上げるように思えるが、実際には、多様なものの中から「選ぶ」ことに適応的な主体でなければその恩恵を受けられなくなっている。さらに、第一章で述べたような個人化の進む社会においては、選択肢を多様化するだけでは、選ぶことの責任、選べないことによって受ける不利益の責任を個人に帰する構造への加担になってしまう。無論、多様な選択肢があること自体が問題なのではなく、事例の場においても選択肢の存在やその利用が否定されているわけではない。しかし、選ばされることの生きづらさ、6.1.2 で見たような、選択肢の多様化では対応できない生きづらさも存在するのである。

本研究では、「名前のない生きづらさ」の存在、および、生きづらさを名前のないままに受け止め応じてきた場の実践から、〈応答〉と過程という視点が導かれた。社会は、「名前のない生きづらさ」を名づけや選択肢の多様化といった従来の対処の限界を示すものと捉え、人々の生きづらさに〈応答〉していく必要があるのではないか。そして、人々から過程を奪う枠組みを問い直し、過程を通して人と環境とがともに更新され続けるようなあり方を探求していくべきなのではないだろうか。

6.2　結論

6.2.1　総括

本研究は、①生きづらさを個人化せず、名前のないままに受け取り応じている実践を解明すること、②そのことを通して新たな視座を引き出し、生きづらさへの従来の対応や社会のあり方の問題を指摘することを目的とし、シューレ大学、YC スタジオ、なるにわ、R さんの開いている場を事例に考察を行った。

シューレ大学では、生きづらさを抱える学生らが、自らの学びや生き方から場そのものまでを創っていた。また、自ら生きづらさを研究し、世界・社会との関係の再構築を通して生きづらさの解体に取り組んでいた。

YC スタジオでは、場にやって来る様々な生きづらさを抱える人々をまず受け止め、その人々の困難に応じる形で、活動が展開されていた。また、支援者ではなく当事者目線に立つことを重んじ、当事者主体の活動も行ってきた。

なるにわは、生きづらさを抱える人を受け止める「居場所」であってきた一方で、支援者―被支援者の関係の固定化を避ける工夫をし、当事者とともに場を創ってきた。また、場自体が苦しみを再生産しないよう、場の語り方や制度との距離感にも注意を払っていた。

R さんは、R さん自身が生きづらさに向き合いそこから抜け出していくために、場づくりを始めた。自らが更新されていく体験、および自分と世界との応答関係を重んじ、実感を手がかりに場を新たに創ったり形や方法を調整したりしていた。

それぞれに立ち位置やあり方は異なるが、いずれの事例にも、場の参加者が自ら試行錯誤する過程が存在しており、その過程を通して場が醸成され、参加者にも変化が起こる様子が見られた。そのような場と参加者の相互作用・相互変容を、本研究では〈応答〉と定義した。

また、様々な生きづらさに対処すべく多様な選択肢が世に供給されてきた一方で、それでも生きづらさを抱える人が現れ続けることに着目し、自ら創っていく過程がないことによる生きづらさの存在を指摘した。同様の問題は、生きづらさを抱える人に名前をつけ対処することによっても起きている。

用意された選択肢から選ぶことを要請するあり方は〈応答〉に乏しく、人々は自ら試し創っていく過程から疎外されている。社会は、従来の生きづらさ対処の限界を示すものとして「名前のない生きづらさ」を捉え、過程を奪いうる枠組みを問い直し、社会環境が人々に絶えず〈応答〉し続けるようなあり方を探求していく必要がある。

6.2.2　本研究の含意と今後の課題

本研究では、多様な選択肢を用意し提供する生きづらさ対処のあり方が、人々から過程を奪っていることを指摘した。従来の社会問題化の回路に乗りづらい生きづらさは、障害や「若者」等、狭義の福祉領域で扱われることが多かったが、本研究では別様の視座・議論を引き出すことができた。この議論を適用できる社会状況や範囲の検討は必要だが、ジェンダー・セクシュアリティや家族、衣食住やまちづくり等、我々の生活をめぐる様々な領域に示唆を与えると考えている。

今後の課題としては、本研究で取り上げた 4 事例の差異の分析が挙げられる。各事例で起きていることを〈応答〉や過程の観点から整理し、その差異を場の条件・構造と関連づけて整理する必要がある。また、〈応答〉や過程、主体といった概念同士の関係も明晰にすべきだろう。本研究の問題関心を様々な人と共有しつつ、引き続き考えていきたい。

付録

フィールドワーク履歴

日付	対象	内容
2017		
10月28日	シューレ大学	第7回研究イベント「世界を自分に取り戻す」への参加
12月23日	シューレ大学	第9回演劇公演の観劇
2019		
6月22日	シューレ大学	シューレ大学20周年イベントへの参加
8月25日	シューレ大学	第12回シューレ大学国際映画祭への参加
9月10日	なるにわ	生きづらさからの当事者研究会、および有志お茶会への参加
12月24日	シューレ大学	Aさんへのヒアリング①（1h30m）
2020		
2月15日	シューレ大学	絵画展「世界を自分に取り戻す」を鑑賞
7月10日	シューレ大学	Aさんへのヒアリング②（40m）
7月27日	Rさん	京都のらびと学舎の農作業への参加
7月28日	Rさん	Rさんへのヒアリング①（2h30m）
8月10日	なるにわ	Yさんへのヒアリング（1h45m）、および学習会への参加
8月14日	Rさん	私の探究・研究相談室への参加（オンライン）
10月22日	YCスタジオ	Eさんへのヒアリング（3h45m）、および夕食
10月30日	Rさん	Rさんへのヒアリング②（オンライン）（1h15m）

フィールド同士の関係

筆者がシューレ大学を知ったのは、2017 年に知人から研究イベントを紹介されたことがきっかけである。一方、なるにわのことは、SNS で見かけた『名前のない生きづらさ』に関する情報から知ったと記憶している。

なるにわと YC スタジオには長年の交流があり、出張づら研が YC スタジオで開かれたり、『名前のない生きづらさ』の中で YC スタジオが紹介されたりしている。R さんも、K さんに誘われ、づら研で話題提供をしたりなるにわで読書会を開いたりしたことがある。

フィールド同士の比較

シューレ大学と R さんの開いている場は、場の目的性が比較的強いのに対し、YC スタジオとなるにわは「居場所」を掲げ、受け止めるというニュアンスがある。また、シューレ大学と YC スタジオが平日基本的に開かれており、常勤スタッフがいるのに対し、なるにわと R さんの場は都度、多くて週 1 で開き、有志で集まっている色合いが強い。

シューレ大学は学費を年間で払うため、誰がメンバーかが明確であり、それゆえにプロジェクトやアルバイトの会のような取り組みが行いやすいと思われる。対して他の 3 事例は、集団内外の境界が曖昧になっている。YC スタジオは、街・地域にも開かれている。

年表（統合版）

年	シューレ大学　Aさん
1985	東京シューレ設立
1992	東京シューレでボランティア開始
1995	『登校拒否のエスノグラフィー』出版
1998	設立準備委員会「吾輩の会」
1999	シューレ大学開設
	韓国ハジャセンターとの交流
2000	映画・映像プロジェクト
	ソーラーカープロジェクト開始
2002	「最初の晩餐」開始
	ミュージカル（後の演劇）プロジェクト開始
2003	公開イベント（研究発表、演劇「赤鬼」）
2004	
2007	キャンパス移転
2008	第一回国際映画祭「生きたいように生きる」
2010	『閉塞感のある社会で生きたいように生きる』
	株式会社創造集団440Hz設立
2011	被災地支援活動の開始
	第一回研究イベント「世界を自分に取り戻す」
2016	TURNフェス参加
2017	全国若者ひきこもり協同実践交流会に参加
2018	豊島区主催イベントで演劇
2019	20周年イベント開催
2020	「TDU一雫穿大学」に改名・独立

	YCスタジオ　Eさん
1990	転校後、長男が不登校に（次男も）
1991	3人で親の会を立ち上げる
1992	子どもの居場所開設（のちのフリーダス）
1996	子どもの人権オンブズパーソン開始
1998	『ミンデュルレ』にフリーダスが紹介される
	韓国のハジャセンター等との交流
2002	日本児童青年精神医学会 理事
2004	YCスタジオ設立
2005	町家の古民家を借りる
2008	クッキングハウス松浦氏の講演
2009	アート展『Diary in art-マグマたちの噴出』
2011	郊外の畑で農業を始める
2017	島根子ども若者の居場所応援ネットワーク
2018	町家から3F建てビルへ移転
2019	専門家と当事者による連続学習会を主催

年	社会
1985	
1989	バブル景気
1992	バブル崩壊
1995	阪神淡路大震災、地下鉄サリン、Windows 95
1998	NPO法、「ひきこもり」、不登校新聞創刊
1999	韓国ハジャセンター設立
2000	
2001	べてるの家で当事者研究が始まる
2002	『心の専門家はいらない』
2003	『当事者主権』
2004	「ニート」「自己責任」『不登校は終わらない』
2006	地域若者サポステ開始、「ワーキングプア」
2007	世界金融危機、郵政民営化
2008	iPhone・Twitter、脱ゆとり教育
2010	内閣府「ひきこもり70万人」
	「無縁社会」
2011	東日本大震災
2013	ひきこもり大学発足
2016	「教育機会確保法」制定
	ひきこもり新聞創刊
2018	ひきポス創刊
2019	登戸通り魔事件、元農水事務次官長男殺害事件
2020	新型コロナ

年	なるにわ　Kさん
1992	東京シューレとの出会い
1996	東京シューレのスタッフに
1998	不登校新聞創刊、編集長に
2000	大阪に移る
2001	フリースクール・フォロ設立
2006	コムニタス・フォロ設立　編集長辞任
	タペルナ・フォロ（～2009年）
	『迷子の時代を生き抜くために』出版
2011	づら研を開始
2012	フォロが現在地に移転
	大学の非常勤講師
2014	「なるにわ」に名称変更、なるにわラジオ
2015	「ひきこもるデー」
2017	共著『名前のない生きづらさ』出版
2018	「お庭番」体制の開始

年	Rさん
1975	愛媛に生まれる
1990頃	フラッシュバックが始まる
	北海道の牧場で1年間住み込み
	帰郷、バイトをしながら高校進学を目指す
	全日制高校→通信制高校→大検取得
	大学では臨床心理学を専攻。演劇部
2003頃	坂上香さんが講師として大学に来る
	四国八十八か所巡りを行う
	修士課程に進学（人類学、四国遍路の研究）
	「人と人を媒介する」場づくりを実施
	糸川さんと自給農法との出会い
2007	2つ目の大学院休学時。宇治で田んぼの活動
	京都精華大学の公開講座への参加
2010	Social Kitchenでの畑レクチャー企画開始
2013	京都のらびと学舎としてリニューアル
2018	ジャンル難民学会（→私の探究・研究相談室）
2019	炊き出し活動への参加
2020	畑のオープン日を始める

コラム：当事者研究試論

1.1 で、社会問題化の回路に乗らない生きづらさが、個人化の進行に伴い医療化・心理主義化されていった流れを論じた。そのような中、「弱い主体」と集約不可能性・個別性を前提にしながらも、「診断名」の付与された生きづらさを共同体や関係性の問題として再定義するような取り組みが広がっている。その一つが当事者研究だ。

当事者研究とは、2001 年に精神障害等を抱える人々の活動拠点「浦河べてるの家」で始まったエンパワメント・アプローチであり、彼ら彼女らの生活経験から生まれた自助と自治のプログラムである（向谷地 2013）。それぞれの生きづらさや苦労を大切な資源として持ち寄り、仲間とともにその背景を見極め、ユニークな発想で苦労の解釈や対処法を編み出していく。研究を通して、それまで取り除くべき無意味なものとして扱われてきた症状に新たな意味や可能性が見出され、また、問題とみなされてきた言動がその理由やメカニズムが周囲に理解されることによって、本人が変化せずとも問題でなくなることもある（熊谷編 2017: 3）。この当事者研究に、類似の活動を以前から独自に行っていたダルク女性ハウス（薬物依存症女性の回復施設）や綾屋紗月・熊谷晋一郎（綾屋は発達障害当事者）等が合流し、ネットワークが築かれていった。現在では吃音や難病、パーソナリティ障害、「非モテ」、アダルトチルドレン、支援者等、全国の様々な主体によって当事者研究会が開かれている。

当事者研究は、北海道浦河町での回復者クラブの活動（1979 年～）や AA（アルコホーリクス・アノニマス）、認知行動療法の一つである SST（生活技能訓練）や「一人一研究」という人材育成手法等、様々な潮流を汲んだものであるが（向谷地 2003）、熊谷は当事者運動が取りこぼしてきた領域を支えるものとしても位置づけている（熊谷 2015）。精神障害や発達障害等、傍目に分かりづらい困難を抱える人は、本人もその困難の正体を把握できず、当事者運動の主体のように明瞭なニーズを持って周囲環境と交渉していくことが難しい。当事者研究はこうした人々に、自己を把握し周囲にニーズを伝えるための言葉を供給しているというのである。この「分かりづらい生きづらさを理解・説明可能なものにする」機能が、1.1 で述べたような「生きづらさ」の時代によく符合するために、当事者研究は広がっていったと考えられる。

一方で、当事者研究の普及に伴い位置づけが変化し、いくつかの課題が浮上し始めた。

まず、社会への波及性の問題である。例えば好井裕明は、当事者研究による知見が他の似た境遇の人々の「研究」を助けると評価しつつも、支配的な文化への波及性について疑問を呈している（好井 2014）。マジョリティ（「支配的な文化を生きる」人）の多くは、「研究」結果の分かりやすい説明に感動・了解するだけで、自らの日常の非自明性に気がつくことはあっても、日常を組み換えようとはしないのではないかというのだ。確かにべてるの家の実践には、「反転・非常識」（向谷地 2013）という理念やべてるの世界観への地域住民の巻き込み（向谷地 2009）、産業面での地域貢献等の要素があったが、それらはしばしば見過ごされ、取り入れている当事者研究会も多くはない。2020 年実施の企業向け研修プログラム「当事者研究導入講座」でも、「多様性を高い創造性につなげてインクルーシブな組織を作るた

め」と打ち出されており（東京大学エクステンション 2020）、当事者研究の役割が、当事者のリアリティをマジョリティに理解可能なように説明し、合理的配慮を受けマジョリティの秩序や世界に回収されるための技法へと、縮小・横滑りしていく危うさが見られる。

また、生活の場での共同性という課題も挙げられる。べてるの家やダルク女性ハウスでは日常生活の一環として当事者研究の時間が設けられているが、他の当事者研究会は会と参加者の生活の場が別個であるケースも多い（無論、そのような距離感を求める人もいるだろう）。そのため、個人の問題だとされてきたものが場の問題として取り組まれるような、生活の場に根差した共同性[41]（野口 2018: 227）が起こりづらく、個人は当事者研究の知を動員しながら一人で生活環境と交渉していくことになりやすい。

このように、「弱い主体」と集約不可能性を前提にしつつ、問題の定義権を当事者に取り戻す実践と思われた当事者研究も、社会への波及性と生活の場での共同性という点において本来の意義を発揮できないリスクを抱えている。

参考文献

熊谷晋一郎，2015,「当事者研究への招待―知識と技術のバリアフリーを目指して」『生産研究』67(5): 467-474.

熊谷晋一郎編，2017,『みんなの当事者研究』臨床心理学増刊第 9 号，金剛出版.

向谷地生良，2009,「当事者研究が開く世界」(2020 年 12 月 13 日取得，https: //bethel-net.jp/noho.html).

————，2013,「当事者研究について」，当事者研究ネットワーク（2020 年 12 月 12 日取得，https: //toukennet.jp/?page_id=2).

野口裕二，2018,『ナラティヴと共同性―自助グループ・当事者研究・オープンダイアローグ』青土社.

東京大学エクステンション株式会社，2020,「当事者研究導入講座のご案内」(2020 年 12 月 13 日取得，https://twitter.com/UTokyo_News/status/1323135266354274305 および https://utokyo-ext.co.jp/upload_utex/1877/fileUpload/ids_201119.pdf).

好井裕明，2014,「当事者『研究』の社会学の可能性について―当事者『研究』は何をめざすのか―」『三田社会学』19: 70-79.

[41] 野口（2018）はオープンダイアローグに関する箇所で「生活の場に根差した持続的な関係性、すなわち共同性」を論じている。

参考文献

プロローグ

小沢牧子，2002，『「心の専門家」はいらない』洋泉社.

野田彩花・山下耕平，2017，『名前のない生きづらさ』子どもの風出版会.

序・第一章

Beck, Ulrich, 1986, *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Suhrkamp Verlag.（東廉・伊藤美登里訳，1998，『危険社会―新しい近代への道』法政大学出版局.）.

Conrad, P., J. W. Schneider & J. R. Gusfield, 1992, *Deviance and Medicalization: From Badness to Sickness: Expanded Edition*, Temple University Press.（進藤雄三・杉田聡・近藤正英訳，2003，『逸脱と医療化―悪から病いへ』ミネルヴァ書房.）.

藤野友紀，2007，「『支援』研究のはじまりにあたって―生きづらさと障害の起源」『子ども発達臨床研究』1: 45-51.

伊藤美登里, 2008,「U. ベックの個人化論―再帰的近代における個人と社会」『社会学評論』59(2): 316-330

株本千鶴，2016，「欧米社会における『ホスピスの医療化』研究の動向と展望」『いのちの未来』1: 75-99.

貴戸理恵，2011，『「コミュニケーション能力がない」と悩むまえに―生きづらさを考える』岩波ブックレット 806.

――――，2018，『「コミュ障」の社会学』青土社.

Kido, Rie, 2018, *Engaging the angst of unemployed youth in post - industrial Japan: a narrative self - help approach*, University of Adelaide, School of Social Sciences, Thesis（Ph.D.）.

草柳千早，2004，『「曖昧な生きづらさ」と社会：クレイム申し立ての社会学』世界思想社.

野田彩花・山下耕平，2017，『名前のない生きづらさ』子どもの風出版会.

Spector, M. B. & J. I. Kitsuse, 1977, *Constructing Social Problems*, Aldine de Gruyter.（村上直之・中河伸俊・鮎川潤・森俊太訳，1990，『社会問題の構築―ラベリング理論をこえて』マルジュ社.）.

好井裕明，2014，「当事者『研究』の社会学の可能性について―当事者『研究』は何をめざすのか―」『三田社会学』19: 70-79.

第二章

石本恵美監督，2019，「シューレ大学学生図鑑 File1. 亀井渚」（第 12 回シューレ大学国際映画祭 2019 年 8 月 25 日鑑賞，https://shureuniv.org/filmfes/）.

文部科学省，2019,「令和元年度学校基本調査（速報値）の公表について」(2020 年 12 月 12 日取得，https://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/__icsFiles/afieldfile/2019/08/08/1419592_1.pdf).
文部科学省中央教育審議会，2017,「高等教育に関する基礎データ（都道府県別）」(2020 年 12 月 12 日取得，https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/__icsFiles/afieldfile/2017/12/19/1399599_03.pdf).
文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室，2020,「大学入学者選抜改革の動向」(2020 年 12 月 12 日取得，https://www.mext.go.jp/component/a_menu/other/detail/__icsFiles/afieldfile/2018/09/11/1407981_05.pdf).
文部科学省初等中等教育局児童生徒課，2019,「平成 30 年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」(2020 年 12 月 12 日取得，https://www.mext.go.jp/content/1410392.pdf).
内閣府，2016,「若者の生活に関する調査報告書」(2020 年 12 月 16 日取得，https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/h27/pdf-index.html)
————，2019,「生活状況に関する調査 （平成 30 年度)」(2020 年 12 月 16 日取得，https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/life/h30/pdf-index.html)
シューレ大学，2010,『閉塞感のある社会で生きたいように生きる』東京シューレ出版.
————，2017,「修了報告会を行いました」(2020 年 12 月 12 日取得，https://shureuniv.org/blog/2017/03/2016).
————，2019,「自分から始まる生き方を創る シューレ大学 20 周年記念冊子」シューレ大学.
雫穿大学，2020,「若者が自分として『生きる』『働く』を模索できる『学びの場』をつくりたい！」，GoodMorning（2020 年 12 月 12 日取得，https://camp-fire.jp/projects/view/328743).
東京シューレ，2020,「『シューレ』って、どんな意味ですか？」，東京シューレ総合ホームページ（2020 年 12 月 12 日取得，https://www.tokyoshure.jp/qanda/faq_board.cgi?mode=view&kno=1).
————，2020,「2020 年度通常総会（第 22 期）議案書」(2020 年 12 月 12 日取得，https://www.shure.or.jp/2020soukai/).
東京都，2019,「ひきこもり等の若者支援プログラム」(2020 年 12 月 12 日取得，https://www.hikikomori-tokyo.jp/wakamono/pdf/program.pdf).

第三章

クッキングハウス，2018,「松浦幸子 2007 年講演記録」(2020 年 12 月 27 日取得，http://www.cookinghouse.jp/archive/sachiko_schedule2008.html).
不登校 50 年証言プロジェクト，2017,「#20 吾郷一二実さん、木村悦子さん」(2020 年 12

月 27 日取得，http://futoko50.sblo.jp/article/180134803.html）.
きらりの集い 2019 in しまね 実行委員会，2019，「“きらり”をみつけに し・ま・ね」（2020 年 12 月 20 日取得，https://shimanekirari.wixsite.com/2019）.
日本児童青年精神医学会，2005，「塩酸パロキセチン水和物 18 歳未満うつ病への使用禁忌見直しに関する要望書」（2020 年 12 月 24 日取得，https://www.mhlw.go.jp/shingi/2006/01/dl/s0127-9c04.pdf）.
日本経済新聞，2010，「元首席専門官に有罪判決 広島少年院暴行『矯正教育を逸脱』」（2020 年 12 月 24 日取得，https://www.nikkei.com/article/DGXNASDG0102Z_R01C10A1CR0000）.
青少年自助自立支援機構，2017，「NPO 法人 YC スタジオ 生きづらさを抱える若者たちの居場所から 『もうひとつの生き方・働き方』が発信されている」（2020 年 12 月 27 日取得，http://compass-navi.or.jp/interview/post-42.html）.
島根県警察，2020，「子ども支援センターの設置状況」（2020 年 12 月 18 日取得，https://www.pref.shimane.lg.jp/police/01_safety_of_life/safetyinfo_kodomo_jyosei/04/recovery/setup.html）.
シューレ大学国際映画祭，2008，「シューレ大学国際映画祭―生きたいように生きる」（2020 年 12 月 27 日取得，https://shureuniv.org/filmfes/08/）.
寺島彰，2008，「わが国におけるソーシャル・ファーム発展の可能性に関する考察」『浦和論叢』38: 105-119.
若者の社会的包摂研究会，2011，「ハジャセンター」（2020 年 12 月 18 日取得，http://siyp2010.blogspot.com/2011/05/blog-post_173.html）.
山下耕平，2019，「『フリースクール』の置かれている現状と『居場所』の今後を考える―趙韓恵貞インタビューから」『社会臨床雑誌』27(1): 29-36.

第四章

貴戸理恵・山下耕平，2012，「不登校は終わったのか？―『不登校は終わらない』をめぐる再考対談」フォロ.
フォロ，2013，『づら研やってます。生きづらさからの当事者研究会レポート Vol.2』フォロ.
————，2019，『づら研やってます。生きづらさからの当事者研究会レポート Vol.4』フォロ.
不登校 50 年証言プロジェクト，2018，「#36 常野雄次郎さん」（2020 年 12 月 29 日取得，http://futoko50.sblo.jp/article/182761449.html）.
宮地尚子，2007，「環状島=トラウマの地政学」みすず書房.
野田彩花・山下耕平，2017，『名前のない生きづらさ』子どもの風出版会.
杉本賢治，2019，「NPO 法人フォロ事務局長、『不登校新聞』元編集長 山下耕平さんイン

タビュー」インタビューサイト・ユーフォニアム（2020 年 12 月 28 日取得，https://www.kenjisugimoto.net/%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%82%BF%E3%83%93%E3%83%A5%E3%83%BC/%E5%B1%B1%E4%B8%8B%E8%80%95%E5%B9%B3%E3%81%95%E3%82%93-npo%E6%B3%95%E4%BA%BA%E3%83%95%E3%82%A9%E3%83%AD-%E5%85%83-%E4%B8%8D%E7%99%BB%E6%A0%A1%E6%96%B0%E8%81%9E-%E7%B7%A8%E9%9B%86%E9%95%B7-%E5%95%8F%E3%81%84%E3%81%AF%E3%83%9E%E3%82%B8%E3%83%A7%E3%83%AA%E3%83%86%E3%82%A3%E3%81%AB%E5%90%91%E3%81%91%E3%81%A6%E3%83%BC%E4%B8%8D%E7%99%BB%E6%A0%A1-%E3%81%B2%E3%81%8D%E3%81%93%E3%82%82%E3%82%8A-%E3%81%8B%E3%82%89-%E8%80%83%E3%81%88%E3%82%8B/）.

山下耕平，2009，「冊子原稿その 3 ――「現場プロジェクト」「聞くプロジェクト」」（2020 年 12 月 30 日取得，http://foro.jp/narnywa_blog/wordpress/?p=133）

――――，2019，「手弁当パラドックス」（2020 年 12 月 30 日取得，https://maigopeople.blogspot.com/2019/10/blog-post.html）.

第五章

アサダワタル，2014，『コミュニティ難民のススメ―表現と仕事のハザマにあること』木楽舎.

「環境と対話」研究会編，2020，『環境と対話　地域と当事者を繋ぐ試み vol.2』「環境と対話」研究会.

京都のらびと学舎，2020，「2020 年畑オープン日のお知らせ」（2021 年 1 月 3 日取得，https://www.facebook.com/kyotonorabitogakusya/posts/1404671886379181）.

京都精華大学，2012，「京都精華大学公開講座 GARDEN」，10+1website，（2021 年 1 月 4 日取得，https://www.10plus1.jp/information/2007/03/post-376.php）.

尾張旭市，2020，「『香害』ご存知ですか」，尾張旭市，（2021 年 1 月 11 日取得，https://www.city.owariasahi.lg.jp/kurasi/seikatu/kankyou/kougai/kougai2.html）.

Social Kitchen，2021，「hanare×Social Kitchen」，Social Kitchen（2021 年 1 月 4 日取得，http://hanareproject.net/）.

turumura，2017，「これまでの経緯　このブログについて」，降りていくブログ，（2021 年 1 月 4 日取得，https://kurahate22.hatenablog.com/entry/2017/08/22/213236）.

――――，2018，「100 年後の価値観」，降りていくブログ，（2021 年 1 月 4 日取得，https://kurahate22.hatenablog.com/entry/2018/09/18/142028）.

東京都人権啓発センター，2015，「被害者と加害者の対話がもたらすもの　『修復的司法』で犯罪被害からの回復をめざす」『TOKYO 人権』67.

第六章

有末賢・大山小夜，2015,「公募特集『現代社会と生きづらさ』によせて」日本社会学会編『社会学評論』66(4): 446-459.

小倉康嗣，2014,「家族のそのさき、絆のそのさき」渡辺秀樹・竹ノ下弘久編『越境する家族社会学』: 190-211.

＋

引用はしていないものの、本研究の視点に影響を与えたもの、あるいは響き合うものとしていくつかの文献を以下に挙げておく。

Fisher, Mark, 2009, *Capitalist Realism: Is there no alternative?*, John Hunt Publishing Ltd.（セバスチャン・ブロイ・河南瑠莉訳，2018,『資本主義リアリズム』堀之内出版.）.

御旅屋達，2020,「支援する者、される者、私は、あなたは、何者か」阿比留久美・岡部茜・御旅屋達・原未来・南出吉祥編，2020,『「若者／支援」を読み解くブックガイド』かもがわ出版，122-123.

崎山治男・伊藤智樹・佐藤恵・三井さよ編，2008,『〈支援〉の社会学―現場に向き合う思考』青弓社.

東畑開人，2019,『居るのはつらいよ―ケアとセラピーについての覚書』医学書院.

上野千鶴子編，2005,『脱アイデンティティ』勁草書房.

謝辞

はじめに、指導教官の清水亮先生に厚くお礼申し上げます。私がまだ自分の研究動機を取り繕っていた頃から、問題関心がなかなか言葉にならなかった期間、調査に迷いが生じていた時、そして不安極まる論文提出直前まで、大変お世話になりました。人生のうちのこの 2 年間を清水研究室で過ごすことができて本当に幸いでした。

副指導の岡部明子先生からは、重要なタイミングで核心をついたコメントをいただきました。おかげ様で徐々にパズルのピースがはまっていくような気づきを得られました。ありがとうございました。

そして何よりも、フィールドで出会った方々、特に本研究の調査に多大なるご協力をいただいた A さん、E さん、K さん、R さんに感謝申し上げます。皆様には研究の過程で多くの学びをいただいただけでなく、学生としても一人の人間としてもエンパワメントされました。さらには、皆様との出会いを通して私のリアリティは大きく変わりました。それまで抱いていた世界・社会との関わりや今後の生き方、日常生活をめぐる閉塞感に風穴が開き、また、「この社会とどう向き合っていくのか」について思いを新たにすることができました。これから、より自由の風の吹く方へ歩んでいければと思います。本当にありがとうございました。

清水研究室の皆さんには、研究の相談やゼミのイベント、大学院生活全般において大変お世話になりました。同期の鳥居さん、西澤さん、後輩の 2 人、OBOG の方々、そして何から何までお世話になった三枝さん、ありがとうございました。ピアサポーター仲間の深谷くんには草稿の段階で何度も的確な助言をいただきました。文系院生室の皆さんや社会文化環境学専攻の皆さんには、ゼミや研究発表会の際にコメントいただき、学生生活においても支えていただきました。ありがとうございました。

そして、私が苦しみの淵にいた時も今も応援し続けてくれる母、私の航海を基盤から支えてくれた父、私に大きな問いをくれる弟に感謝します。

最後に、溺れそうになりながらも大事な問いと願いを手放さなかった、2017 年の自分にこの論文を捧げたいと思います。